プロジェクト研究１

規範意識を高める道徳教育の展開

香芝市立旭ケ丘小学校教諭　永利　大次　　研究指導主事　松本　吉央
Nagatoshi Daiji　　Matsumoto Yoshio
葛城市立新庄北小学校教諭　山岡　佐和　　研究指導主事　廣見　敦志
Yamaoka Sawa　　Hiromi Atsushi

要　　旨

奈良県の児童生徒の規範意識が全国に比べて低いという実態を踏まえ、道徳の時間と体験活動を関連させた取組や学校全体での道徳教育の取組から、児童の規範意識の醸成を図った。集団で目的を達成する際に必要となる役割を話し合い、それぞれの責任を果たしていくような体験活動と道徳の時間を関連させる取組を行い、集団の中での役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義の理解を図ることにより、よりよい人間関係を維持するために約束やきまりがあることの理解につながり、児童の規範意識が高まった。

キーワード：　規範意識、役割、責任、約束やきまり、道徳教育推進教師

１　はじめに

(1)　規範意識の低下について

駅のホームや電車内、コンビニの駐車場などで地べたに座り込む、図書館などでまわりを気にせず大声で話すなどの子どもによる行為を公共の場において目にする機会が多い。

『小学校学習指導要領解説　道徳編』にもあるように、現在、児童が感化され影響を強く受ける社会全体のモラルが低下している。社会全体や他人のことを考えず専ら個人の利害損得を優先させる、他者への責任転嫁など責任感が欠如している、社会をよりよくしていこうとする真摯な努力が軽視される、というような社会的風潮は、社会全体の規範意識を低下させ、子どもの規範意識の育ちに影響を与えている。先述したような迷惑行為の背景には、子どもの規範意識の健全な育ちが充分でないことが要因の一つとして考えられる。

規範意識の低下は、我が国の教育における課題となっている。

(2)　本県の実態について

平成19年度から実施された全国学力・学習状況調査における児童質問紙調査の結果によると、「学校のきまりを守っていますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合は、年度毎に少しずつ改善は見られるものの全国平均よりも低い状況が継続している（表１）。

平成24年度の調査結果においても、表１に示したように、規範意識に関わる質問に対して肯定的に答えた割合は全国平均を下回っており、規範意識の低さが県の教育に関する課題の

一つに挙げられている。

表１　規範意識に関わる児童質問紙調査の結果（奈良県と全国）

質　　問		H19	H20	H21	H22	H23	H24
「学校のきまりを守っている」と回答した児童の割合	奈良県	82.8	82.9	84.1	86.4	81.2	87.5
	全国	86.2	86.3	88.5	89.2	—	91.3
「友達との約束を守っている」と回答した児童の割合	奈良県	96.0	96.6	96.2	96.6	97.6	96.6
	全国	96.0	96.4	96.5	95.7	—	97.1
「いじめは、どんな理由があってもいけない」と回答した児童の割合	奈良県	93.9	94.0	93.9	94.2	95.0	94.6
	全国	94.7	94.7	94.9	95.0	—	95.4

（H19～22、24全国学力・学習状況調査、H23学習状況調査による）

(3)　規範意識の定義

『児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料』（文部科学省・警察庁　2006）には、「『規範』を『人間が行動したり判断したりするときに従うべき価値判断の基準』とし、『規範意識』を『そのような規範を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識』」とある。また、永田繁雄（2006）は、「規範とは、広く集団生活の維持・向上のために一人一人に対して同調を求めるものであり、それに向かう心の動きが規範意識であるといえる。」と述べている。

これらを基に、規範意識を下記のようにとらえた。

> 自分が属する集団や社会を意識し、その中でよりよく過ごすにはどうすればよいのか、人とよりよい関係を保つにはどうすればよいのかが分かり、自分が属している集団や社会の中でよりよい人間関係を維持していこう、その関係を向上させようとする意識。

(4)　昨年度までの取組について

児童生徒の規範意識の醸成を目指し、本研究所は、平成21～23年度にプロジェクト研究を行った。道徳の時間を要とした教育活動全体での道徳教育の取組や、学校全体の協力体制での道徳教育の取組を通して、約束やきまりの意義の主体的な理解を図ることが規範意識の高まりにつながる可能性が高いことを明らかにしてきた。

ア　昨年度までの取組の概要

道徳教育推進教師を中心とした道徳教育推進委員会を設置して、校務分掌各部の機能を生かしながら、道徳教育推進教師と各部とが連携を図る体制を組織した。その中で、道徳教育の全体計画に基づき、各教科等で取り組む道徳教育への理解を深める校内研修、道

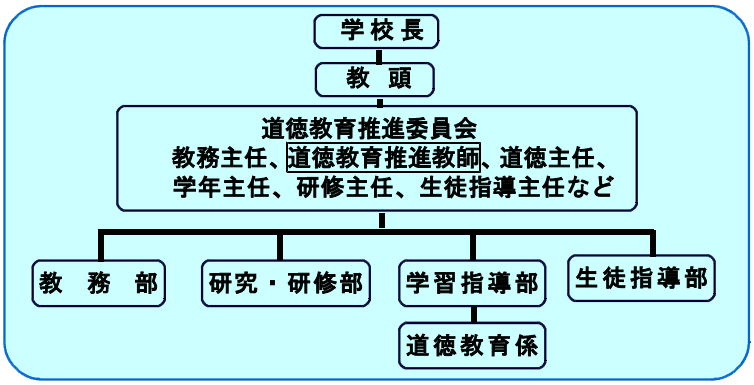


図１　道徳教育推進体制のモデル

徳の時間の授業力向上を図る校内研修、道徳の時間の研究授業などを各部と連携して実施し、学校全体における道徳教育を進めた。

また、約束やきまりは守るべきものという指導だけでなく、約束やきまりを守らないと他の人を傷つけ、大きな迷惑をかけてしまうこと、みんなが安心して過ごせるのは約束やきまりがあり、それをみんなが互いに守っているからであることなど、約束やきまりを大切にする生き方を児童生徒の発達段階に合わせて、その意義を考えさせることが大切である。そのために、自分たちで約束やきまりを話し合う中でつくり上げていく体験活動を重視し、道徳の時間と関連させ、約束やきまりの意義を実感させる取組を行った。

図２　道徳教育の推進に必要と考えられる役割

イ　昨年度までの取組の成果と課題

(ｱ) 成果

○　体験活動と道徳の時間を関連させ、発達の段階に応じて、約束やきまりの意義の主体的な理解を図ったことで、児童生徒の規範意識の向上につながる可能性が見えてきた。

○　各学校の校内組織の実態に合わせて、道徳教育を推進するための役割を担う教職員が、チームとして取り組む体制を整えたことにより、教職員の規範意識を高める取組等に対する意識の向上が図られ、児童生徒の規範意識の向上につながった。

(ｲ) 課題

○　規範意識を高めるためには、学校全体での取組が重要であると考える。そのため、学校の実態に沿った、道徳教育推進教師を中心とした道徳教育の推進を図る協力的な体制づくりの具体を更に明らかにしていかなければならない。

○　規範意識を高める道徳の時間の指導を、道徳の内容項目４－(1)に焦点を当てて取組を進めてきたが、他の内容項目の視点からの取組の有効性を検証し、その在り方を広げていく必要がある。

２　研究目的

(1)　基本的な考え方

今年度は、学校全体の協力体制での道徳教育の取組について、昨年度までの体制づくりで大切にしていたポイントを踏襲しつつ、学校の規模や実態に沿った、道徳教育推進教師を中心とした道徳教育の推進体制を確立することにした。そして、道徳教育の研修の充実等、道徳教育推進教師の役割の具体化に取り組むことで、教職員の道徳教育への意識の向上を図ることをねらいとした。

また、道徳の時間を要とした教育活動全体での道徳教育の取組として、今年度は、「集団の中での自分の役割を自覚し、責任を果たすことの意義への理解」という視点から取組を行った。体験活動では、集団の中の役割や責任を実感したり、集団の成員相互の関わりの大切

さに気付いたりできるよう、集団で目的を達成する際に必要となる役割を話し合い、それぞれの責任を果たす活動に取り組んだ。道徳の時間においては、高学年４－(3)の内容項目に焦点を当てて取り組んだ。それらを関連させて取り組むことによって、集団の中での自分の役割を自覚し、責任を果たすことの意義への理解が、人間関係を維持、向上させようとする意識の高まりにつながると考えた。また、その意識の高まりは、よりよい人間関係を維持、向上させるために約束やきまりがあるという理解へとつながり、ひいては、規範意識の高まりにつながると考えた。

今回の取組の効果については、『学習指導要領解説道徳編』で規範意識を育てるために重要な項目とされ、全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の項目でもある、「学校のきまりを守っていますか」という質問項目から測った。

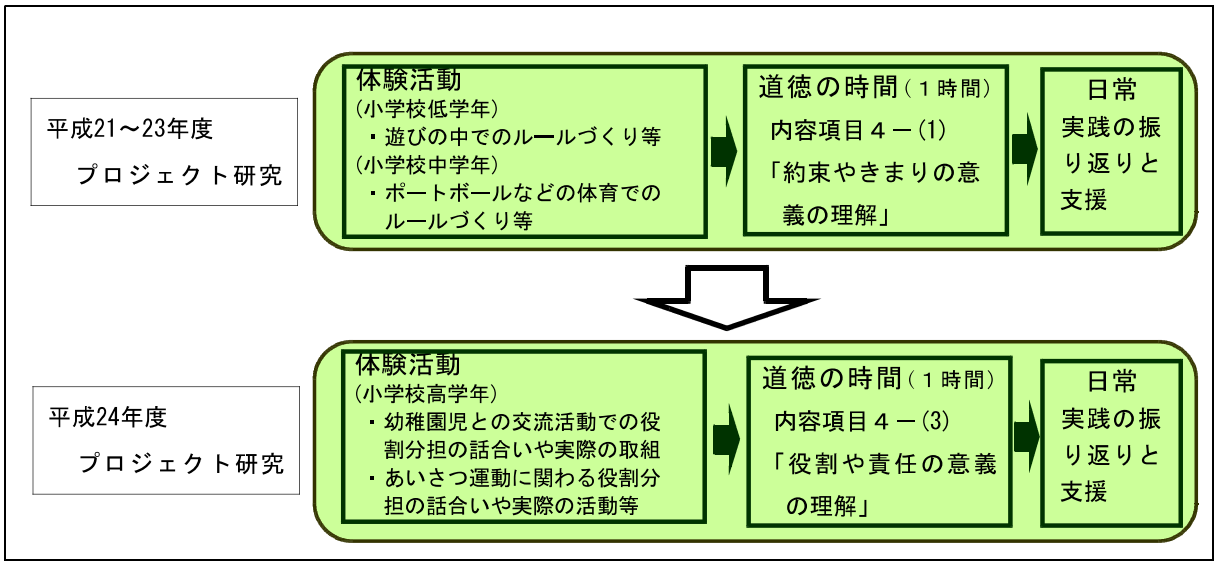


図３　道徳の時間と体験活動を関連させた指導

(2)　研究の仮説

以上のことを考え、本研究の仮説を以下のように設定した。

> 道徳の時間を要とした教育活動全体での道徳教育の取組や学校全体の協力体制での道徳教育の取組を通して、集団の中での役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義の理解を図ることが、よりよい人間関係を維持するために約束やきまりがあることの理解につながり、児童の規範意識が高まる。

３　研究方法

○　学校の実態に沿った道徳教育推進教師を中心とした道徳教育の推進体制を構築し、学校全体の協力体制で取り組む道徳教育の推進を図る。

○　体験活動（集団で目的を達成する際に必要となる役割を話し合い、それぞれの責任を果たしていく活動）と道徳の時間とを関連させた指導を行うことにより、児童の規範意識の向上を図る。

○　「規範に関わる児童の意識」の調査を行い、意識の変容を把握し、取組の成果を検証する。

４　研究内容

(1)　規範意識を高める道徳教育の取組～葛城市立新庄北小学校での取組～

奈良県の教育課題の一つに規範意識の低さが挙げられているが、本校においても、道徳教育の重点目標に「よく考え、自分の力で判断し、約束やきまりを守って行動できる子どもを育てる。」を掲げ、規範意識の向上を目指した取組を続けている。

今年度、取組の充実を目指し、学校全体として道徳教育を推進する体制を整えることや道徳の時間の指導の充実を図ることを具体的な視点として、規範意識を高める道徳教育の取組を進めることとした。

ア　道徳教育推進教師を中心とした学校全体としての道徳教育の取組

(ｱ) 道徳教育推進教師の役割及び道徳教育推進体制

本校は、１学年１学級の小規模校である。教員数も少なく、少人数で校務分掌を担うには一人が何役もこなさなければならず、新たに大枠の体制を整えていくことは、実際上難しい。そのため、道徳教育推進委員会を道徳教育推進教師と教務主任、研究主任の３名にとどめ、生徒指導上でのかかわりには生徒指導主任が、行事とのかかわりには特別活動主任が、というように必要に応じて臨機応変に推進委員会を拡大して対応する体制を構築し、柔軟で機動性の高い推進体制で以下の役割を果たしていった。

- 児童の実態を把握するため、全児童と教員を対象にしたアンケート調査を実施する。そのために事前にアンケート項目の検討を重ねたり、実施した結果の分析を行ったりして、学校全体で道徳教育を行うための指導に生かす。
- 推進委員会で計画し、教職員の道徳教育への意識の向上や道徳の時間の指導の充実につながる研修を実行する。
- 推進委員会を中心とし、各学年担当と連携して道徳教育の年間指導計画を作成する。
- 道徳教育の取組を家庭や地域へ発信する。

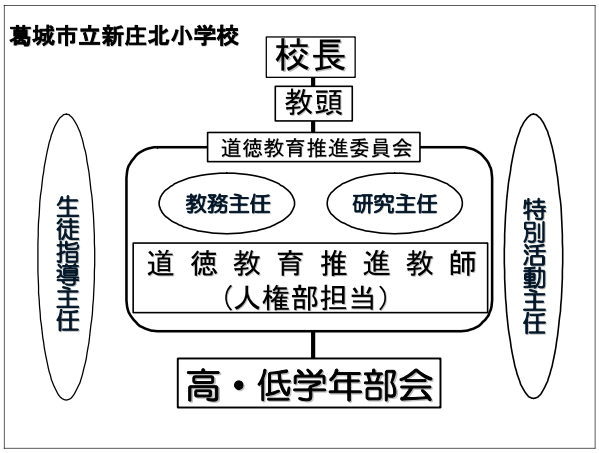


図４　　校内道徳教育推進体制

(ｲ) 取組の具体

ａ　本校児童の実態の把握について

平成22年度、24年度の第６学年（26名・41名）による全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の回答と、全児童を対象とした規範意識に関するアンケートの集計結果を分析した。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の「学校のきまりを守っていますか」という質問に対して「１：当てはまる」、「２：どちらかといえば、当てはまる」と回答した児

童は22年度で92.3%、24年度で95.0%といずれも全国平均（平成22年度89.2%・平成24年度91.3%）を上回っている（図５）。

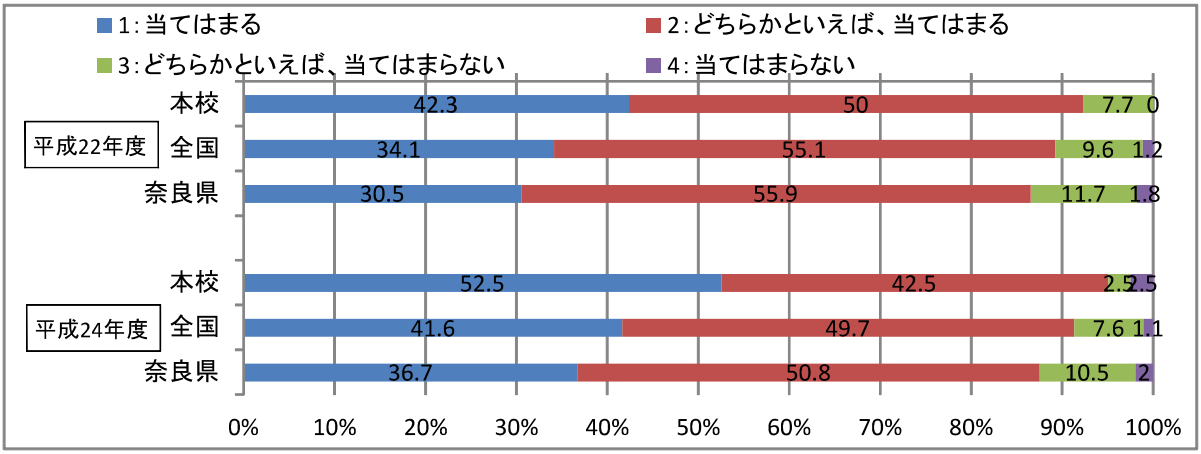


図５　「学校のきまりを守っていますか」の項目での児童の回答状況

（平成22年度・24年度全国学力・学習状況調査より）

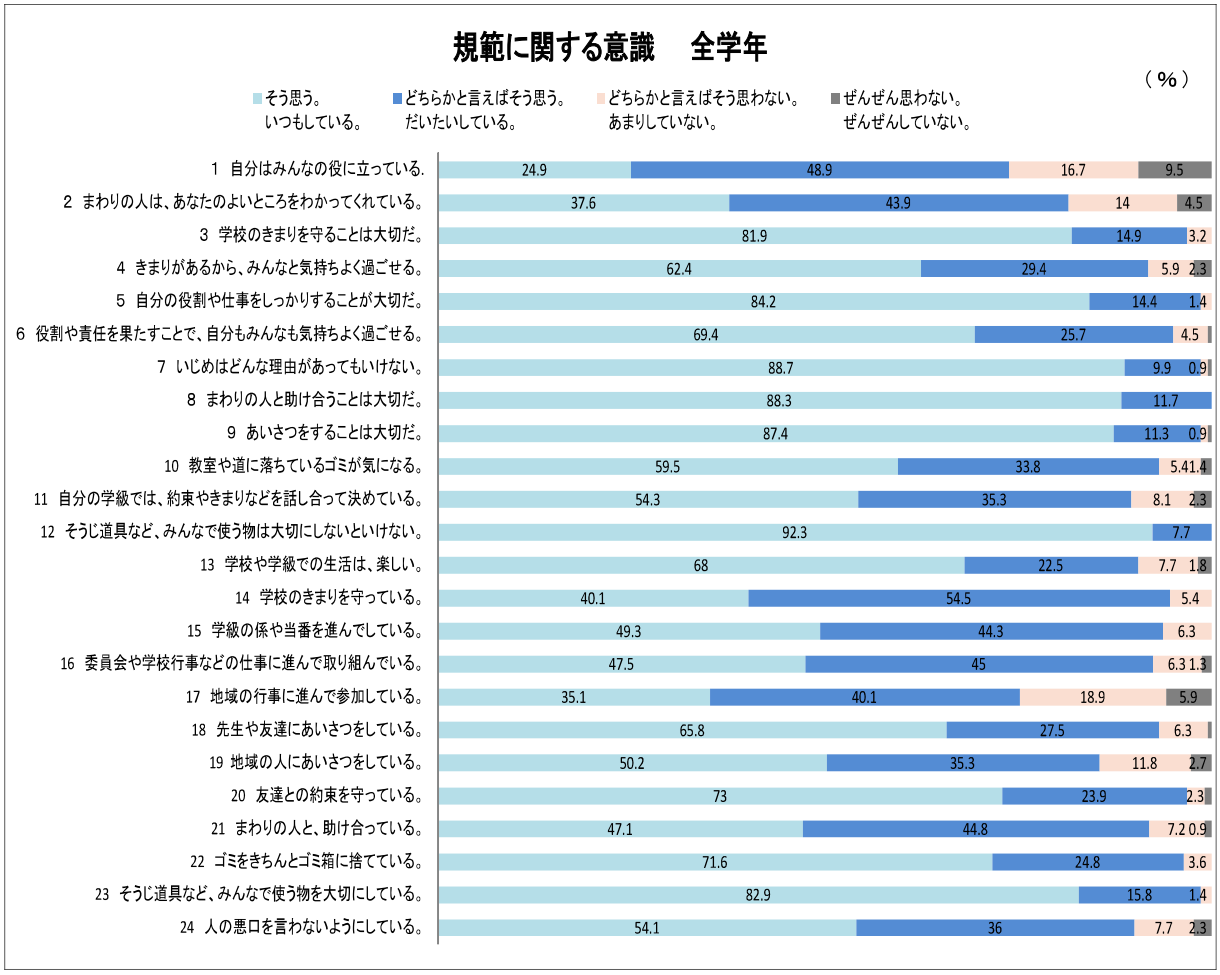


図６　　新庄北小学校全校児童を対象としたアンケート調査の結果（９月実施）

また、全校児童を対象とした規範意識に関するアンケート調査においても、「３ 学校のきまりを守ることは大切だ」、「14 学校のきまりを守っている」という項目に「そう思う・いつもしている」「どちらかと言えばそう思う・だいたいしている」と回答した児童はそれぞれ96.8%、94.6%で、学校全体としても高い結果が見られた（図６）。

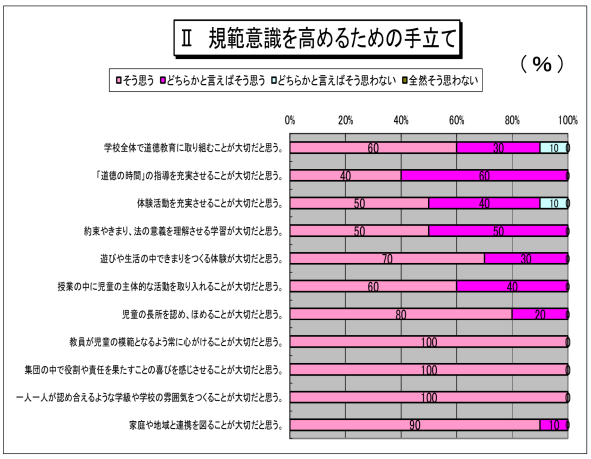
しかしながら「そう思う・いつもしている」だけの数値を見たとき、「3 学校のきまりを守ることは大切だ」では81.9%も存在しているのに、「14 学校のきまりを守っている」では40.1%にとどまっていることから、学校のきまりを守ることの大切さは意識しながらも、実際に行動に移せていない児童がかなり多く存在しているということが分かる。さらに、「4 きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる」、「11 自分の学級では、約束やきまりなどを話し合って決めている」の項目での「そう思う・いつもしている」と回答した児童はそれぞれ、62.4%、54.3%と学校のきまりを守ることは大切であると回答した割合に比べ低かったことから、約束やきまりの意義について理解していない児童が多いことがうかがえる。

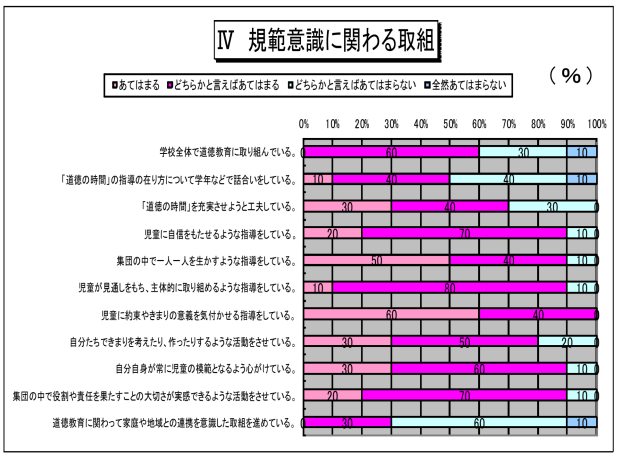
これらのことから、本校の特徴として、約束やきまりについて守っていくことが大切であるという意識は高いが、その意識を実際の行動に移せていない児童が多い傾向にある。その理由として、約束やきまりそのものの意義や、なぜ守っていく必要があるのかということについての理解が十分ではなく、自らが所属する集団の一員として過ごすために約束やきまりがあることや、その集団をよりよくするためにきまりを大切にしようとする意識にまで及んでいないことが推察される。

このように分析を行い、全教職員に知らせることで、児童の実態の共通理解を図った。また、それとともに、児童の規範に関する意識が高い現状を維持しつつ、道徳教育の充実を図るという方向性を確認した。

b　道徳教育に関する研修の実施

夏期休業中に研究指導主事の支援を得ながら研修を行った。まず教職員を対象として行った「児童の規範意識を高めるための取組についてのアンケート」の結果分析を示し、教職員の道徳教育や規範意識を高める取組に対する認識についての共通理解を図った。以下はその一部である。





- 学校全体で道徳教育に取り組んだり、道徳の時間の指導を充実させたりすることが大切だという意識は高いが、実際に取り組めていないという認識が強い。
- 児童自身が生活の中できまりをつくる体験を重ねることや、集団の中で役割や責任を果たすことの喜びを感じさせることが大切だと意識しながらも、そのような取組になかなか至っていないと思っている。

図７　　児童の規範意識を高めるための取組についてのアンケート調査の結果

共通理解を図った後、道徳教育推進教師の役割について、道徳の時間の授業に関するスキルアップをねらった発問づくりについての研修を行った。この研修により、学校全体で道徳教育に取り組むことへの教職員の理解が深まり、道徳の時間の指導について改めて見つめ直す機会となった。

また、これを受け、夏期休業中の別の機会に、道徳教育推進教師が中心となって、道徳の時間の展開の仕方や資料を基にした発問づくりなどについての研修を行った。参加した教職員からは、「児童が話し合う時間を十分に取り、考えを深めていくことが大切だと分かった。」「発問を考える際の参考になった。」などの声が挙がり、より具体的な道徳の時間の指導の在り方を学び合うことができた。

さらに、11月には本プロジェクトの研究会を兼ねて道徳の公開授業を行い、授業後の研究協議にも全教職員が参加した。授業の展開、板書の工夫、発問の仕方など、授業を通して実践的な研修ができた。

c　道徳教育全体計画と年間指導計画の見直しと作成

道徳教育推進委員会を中心として、前年度の道徳教育の全体計画を見直し、より学校教育目標に近付けるように今年度の全体計画を作成し直した。また、次年度に向けて、各学年の年間指導計画も主題名や主な発問を書き加え、新たに作成し直した。各学年担当に作成に関する留意事項を伝えて進めていたが、その途上で内容項目や指導時間について疑問点や共通理解を図る事項が出てきたことを踏まえ、研究指導主事からの支援も受けながら協議を行った。そうすることにより、道徳の時間の特質や指導に関する理解が深められた。

2012年度　道徳年間指導計画　5年　葛城市立新庄北小学校

5年		主題名	資料名（出典）	ねらい		主な発問	教科学習 期待する価値項目	特別活動・総合 期待する価値項目
一学期	4月	夢を実現するために	いつも全力で	1－（2）不撓不屈 希望・勇気	高い目標を立て、その実現に向けて自分ができることを最後まで全力を尽くしてやり抜こうとする心情を育てる。	○「休めばいいのに」という声に耳を貸さず、平然と残りの4試合に出たのはどうしてでしょう。 ◎イチロー選手は、現在でもトップ選手の一人ですが、すばらしいプレーをし続けられるのはどうしてだと思いますか。	伝え合おう、5年生でがんばりたいこと(国語) 1－(2)	入学式・大そうじ 4－(4) 朝礼、登下校、1－(1)
		あいさつの大切さ	オーストラリアで学んだこと	2－（1）礼儀	心のこもった礼儀の大切さを知り、時と場に応じて行おうとする態度を養う。	○犬の散歩で、初めて会った人に声をかけられたとき、どんな気持ちだったでしょう。 ◎大人の人からあいさつをしてもらったことから、「わたし」はどんなことを考えたのでしょう。		
		健康を見直す	「百シャアのふたごしまい」きんさん、ぎんさん	1－（1）節度・節制	自らの健康を見直し、節度を守って元気に生活しようとする態度を養う。	○きんさんが、せっせと散歩に励んで自分の足を鍛えるようになったのはなぜでしょう。 ◎きんさん、ぎんさんが百歳を超えても元気だったひみつはなんだと思いますか。		
	5月	公共の広場を大切に	駅前広場はだれのもの	4－（1）公徳心・規則の尊重	社会の一員としての自覚を持って、進んで公共のために尽くそうとする態度を養う。	○男の子に反対されたとき、「わたし」はどんなことを思ったのでしょう。 ◎「この町のためじゃないか」という言葉を聞いて、「わたし」はどんな気持ちになったのでしょう。	動物のたん生（理科） 3－(1)	1年生を迎える会 4－(6)
		大切な役割	かれてしまったヒマワリ	4－（3）役割の自覚と責任	自分の役割を果たすことの大切さに気づき、主体的に集団の向上に役立とうとする態度を養う。	○だんだん委員会の仕事をしなくなった「ぼく」はどんな気持ちだったのでしょう。 ◎体育委員の仕事をしている友達の様子を見て、「ぼく」が花壇へ向かって走ったのはなぜでしょう。		交通安全運動 1－(1) バケツ稲植え 4－(4)
		社会への奉仕	わたしのボランティア体験	4－（4）勤労・奉仕	社会に奉仕する喜びを知って、公共のために役に立つ心情を育てる。	○老人ホームでお年寄りを見たとき、「わたし」はどんな気持ちになったのでしょう。 ◎高橋さんの話を聞いたとき、「わたし」はどんなことを考えた		

図８　　新庄北小学校　道徳年間指導計画（一部）

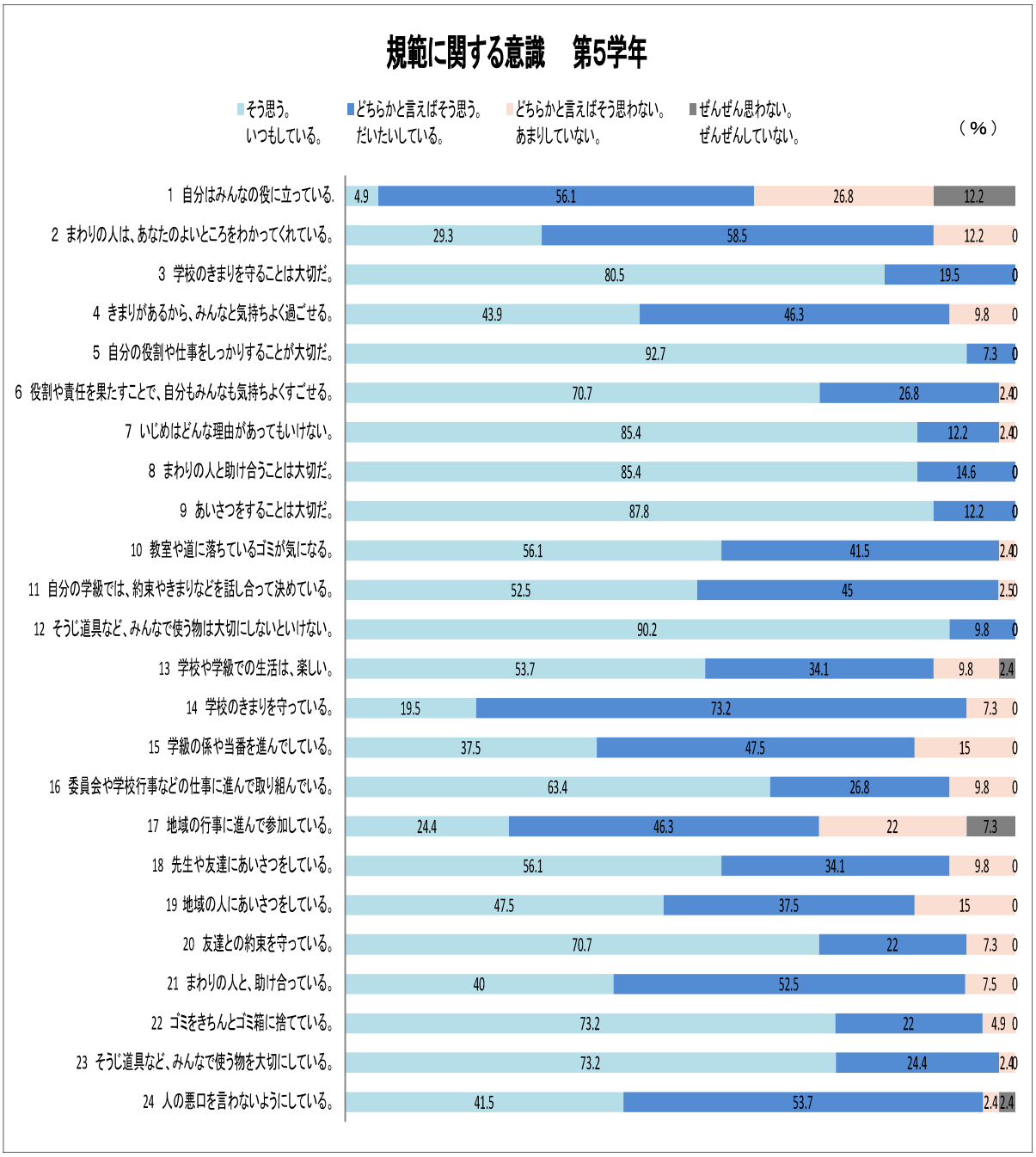
d　家庭・地域への発信

学校だよりで、児童の学習の様子やその成果を保護者や地域の方々に向けて積極的に学校側から発信していくことを実践している。特に、道徳の時間や学級活動の様子については、各学年の取組を月に一度紹介するようにした。この取組を行う中で、「国語や算数などは、教科書を見れば内容が分かるが、道徳や学級活動ではどんなことをしているのか分からなかった。これを見ると、取組がよく分かる。」という言葉を保護者からいただいた。

イ　規範意識の向上を目指した第５学年の取組

(7) 本学年の実態と分析

９月に「規範意識に関するアンケート」を実施した。集計結果は以下の通りである。



「14　学校のきまりを守っている」の質問項目での回答理由

	守らないと先生や家の人におこられるから。	守ると先生や家の人にほめられるから。	みんなが守っているから。	守ることは当たり前だから。	守ることは大事だから。	その他。
14　守れている人の考え	0	2.6	2.6	21.1	68.4	5.3
（その他の理由）	守らないと誰かが傷付くから。安全に過ごせるから。（２名）					
	守らなくても先生や家の人におこられないから。	守ってもだれにもほめられないから。	みんなが守っていないから。	守らないといけない理由が分からないから。	守らなくてもだれにもわからないから。	その他。
14　守れていない人の考え	0	66.7	0	0	0	33.3
（その他の理由）	ちょっと調子に乗っているから。（１名）					

図９　　新庄北小学校第５学年を対象としたアンケート調査の結果

図９からは、約束やきまりを守ることに対する意識は高いが、「14 学校のきまりを守って

いる」の理由を問うたところ、「守るとほめられる」とか「みんなが守っている」などといった回答も存在していることが分かる。また、「４ きまりがあるからみんなと気持ちよく過ごせる」と感じている児童は43.9％と十分高いとはいえない状況であった。

役割や責任を果たすことが大切である、ということについては理解しているが、実際に「係や当番を進んでしている」と回答している児童は37.5％と割合が低く、自己有用感についても「１ 自分がみんなの役に立っている」と感じている児童は4.9％と、ほとんどの児童が十分に実感できてはいないという結果であった。

本学年の実態として、学校全体の実態と同じく、約束やきまりを守ることが大切であると答えていても、「みんなが気持ちよく過ごすために約束やきまりは存在する」ということについては十分に理解できておらず、「与えられたもの」「初めから存在し、守らなければならないもの」であると捉えているように思われる。また、役割を果たすことは大切であるが、「集団の一人としてよりよい集団をつくるために責任を果たすことが大切だ」という意識は十分にもててはいないため、進んで自分の役割を果たそうとする態度には至らず、自分がみんなの役に立っていると感じることもできていないのではないかと考察する。

これらのことから、役割や責任を果たすことが自分たちの生活をよりよくしたり、お互いに気持ちよく活動できたりするものであることが実感できるような「体験活動」と道徳の時間を関連させ、集団の中での役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義の理解を図る取組の必要性を感じた。

(ｲ) 具体的な取組

ａ　役割を自覚し、責任を主体的に果たす体験活動を通して

次に示す流れで取組を進めた。

① 第１回幼稚園との交流会（７月）
② 第５学年児童の実態把握（９月）
③ 第２回幼稚園との交流会（10月）
④ 道徳の時間「みんなの力で」の学習（10月）
⑤ 児童の意識の変容の把握（11月）

本校では、次年度に入学してくる園児が小学校での生活にスムーズになじめるように、幼稚園と小学校との連携を進めている。次年度６学年として新入生との関わりが多くなる５年生がこの取組の中心を担っている。

そこで、今年度は小学校で毎朝体力作りのために行っている「チャレンジサーキット」の一部を園児に教え、一緒に運動遊びを楽しむ活動を学期に１回行うことにした。

第１回交流会では、一緒に活動したい種目（６種目）を決め、園児と５年生児童でペアを作り、固定したペアでサーキットを行うという形をとった。まず、６人のリーダーを選出しリーダー会議を行ってどのグループもサーキットが滞りなく行えるように学級の児童を六つに分けた。このグループの中で１人一つずつ種目のルールや方法の説明を担当することとなった。児童はそれぞれの種目で、どんなことを園児にさせるか、どのように説明するのかなどを考えていた。また、ペアの園児のために記録カードを作成したり、安心してサーキットを行ってもらえるように顔合わせも兼ねて一緒に遊ぶ機会をつくったりするなど準備を重ねた。

交流の当日は、園児の手を握り、優しく声をかけて一生懸命教えようとする児童の姿があ

ったが、やはり戸惑って泣いてしまう園児や、なかなか落ち着いて取り組めない園児もいて、スムーズに活動できているグループは少なかったように思われた。児童の感想の中でも「交流するのは楽しかったが、説明をきちんと聞いてもらえなかった。」「グループをまとめることができなかった。」など、苦労した様子がうかがえた。

《７月の交流会を終えての児童の振り返りより》
自分の責任がしっかりと果たせた　23人
ふつう　11人
あまり果たせなかった　４人
〈あまり果たせなかったと思った理由〉
・　ケガをした子がいた。
・　スムーズにできなかった。
・　幼稚園の子にうまく接することができなかった。
〈もっと楽しくできるために工夫したいこと〉
・　音楽を使って、種目が変わる合図にする。
・　用具を幼稚園の子が喜ぶように工夫する。
・　準備体操や始めの遊びは全員でする。
・　見本を見せたりして幼稚園の子に分かりやすい説明を工夫する。

これらの反省点から、第２回交流会のもち方について話し合った。その中で、「一つの種目を１人で担当するのでは人数が足りずうまくできなかったので、説明する人のお手伝いをする人が必要だと思った。」という意見が出され、次の交流会では固定していたペアを解体し、幅跳びならば砂場にスタンバイして幅跳びだけを教える、というように、種目ごとの担当と６グループに分かれた園児を引率する係を決めてサーキットを行うことになった。さらに、交流会全体を運営することも考えて、必要な役割について話し合った。

《必要だと新しく出された役割》
始めの言葉　準備体操　始めの運動遊び　引率　音楽・計時　終わりの言葉
説明・アドバイス　見本　記録・カード　など

第２回交流会に向けて、それぞれの種目では用具や記録の付け方を工夫したり、引率係ではグループに「パンダさんチーム」や「ライオンさんチーム」など、園児が喜び、覚えやすい名前をつけてチームの名札を作ったり、担当者で話し合いながら準備を進めたりする様子が見受けられた。児童からも、「担当の子と一緒に考えられるから、アイデアを出し合ってどんどんよくなっていく。」という声があり、準備の段階から児童が楽しみ、充実感を得ている様子であった。また、事前にリハーサルを行ってそれぞれの種目の活動を体験して、お互いの工夫を知り合ったりアドバイスをし合ったりして、よりよい活動ができるようにした。

《10月の交流会を終えての児童の振り返りより》
自分の責任がしっかりと果たせた　28人
ふつう　12人
あまり果たせなかった　１人
〈感想〉
・　幼稚園の子も楽しそうにやっていたのでよかったです。僕たちも楽しんでいたので、それもよかったと思います。
・　自分の仕事を終わらせてから、違う役割の人の仕事も手伝ってあげることができたので、今回はしっかり責任が果たせたと思います。引率係が幼稚園の子をまとめるのが、見ていて大変そうだったので、次は引率係を増やすといいと思いました。
・　自分の役割を決めたので、自分のしなければいけないこともよく分かったし、幼稚園の子もみんな１学期よりやり方などがよく分かってやってくれていた。

７月の交流会では、ペアの園児のお世話をすることに精一杯になり、グループの中での自分の役割を意識しにくかった。また、「交流会は楽しくできたが、うまくはいかなかった。」という感想が多かったことから、みんなの力でやり遂げたという実感をもつことはできなかったようである。しかし、10月に行った交流会では、それぞれが自分の役割に責任をもって取り組む姿が見られ、何をしたらよいか分からずぼんやりしてしまう児童はほとんどいなかった。その上、自分の役割を終えたら他の手伝いにまわるというように、全体を見て動こうとする児童の姿もあり、協力して交流会を成功させたという達成感を得ることができた。

ｂ　道徳の時間を通して

ｉ　授業の実際

○　主題名　　みんなの力で　（高４－（３）役割・責任）

○　資料名　　森の絵　（出典『みんなのどうとく５年』学研）

○　資料について

本資料は、学習発表会の劇製作の場面での主人公の役割に対する見方や感じ方の変容を読み取らせていくことで、集団の一人として役割を果たすことの大切さに気付かせるものである。

○　本時のねらい

「誰かがやらないと劇にならないじゃないか。」という言葉から役割を果たすことの大切さに気付いた主人公の心の変容を通して、集団の一人としての自分の役割を自覚し、主体的に協力して責任を果たそうとする意欲を育てる。

○　展開

	学習活動	主な発問と実際の児童の反応	指導上の留意点	備考
導入	１．自分が担っている役割について発表し合う。	**○　学級や学校、家族や地域の中で、今、どんな役割をもって頑張っているか。** ・　落ち葉集会のテーマを募集する仕事。 ・　家で御飯を炊いている。 ・　家でお風呂掃除をしている。	・　いろいろな集団の中の一人として担っている役割があることに目を向けられるようにする。	
展開	２．資料「森の絵」を読んで話し合う。	**○　希望していた女王の役がめぐみさんに決まったとき、えり子はどんなことを思っていたのだろう。** ・　８月の精にしたけど、やっぱり女王役がやりたかった。 ・　めぐみさんがした方がもっといい劇になると思う。 **○　えり子が絵筆を持つ手に力が入らないのはなぜだろう。** ・　自分の役を頑張りたいけど女王役がしたい。 ・　女王になれなくて悔しい。 ・　やっぱり女王役がよかったと後悔している。 **○　「誰かがやらないと劇にならないじゃないか。」という言葉が心の中をかけめぐってい**	・　女王の役をやりたかった気持ちを確認することで、道具係の役割にやる気が出ないことにつながるようにする。 ・　希望していない役割に対して消極的になっているえり子の気持ちに共感できるようにする。 ・　文男の言葉を何度も思い返したり他の友達が熱	資料 場面絵

		たのはなぜだろう。 ・　文男さんは好きじゃなくても頑張っている。自分も好きじゃなくてもみんなのために頑張らなきゃ。 ・　このまま女王役のことばかり考えていていいのかな。 ・　文男さんは頑張っているのに、自分は女王のことばかり考えていて、何をしているんだろう。	心に仕事をしている様子を見たりして、えり子の気持ちが次第に変容していることに気付かせる。	
		◎　ポスターカラーをのびのびと皿にとき始めたえり子は、どんなことを思っていたのだろう。 ・　自分が頑張らないと劇が始まらない。 ・　みんなでいい劇にしたい。 ・　みんなで完成させないといけない。私は私の役を頑張ろう。 ・　文男さんのおかげでやる気が出てきた。 ・　自分の力を出し切っていい絵に仕上げよう。	・　どうして仕事に対して前向きになったのかを考えることで、それぞれの役割を果たすことが、全体の向上につながることに気付けるようにする。	ワークシート
	３．自分の生活を振り返る。	**○　みんなで一つのことをやり遂げるために役割を果たしたことには、どんなことがあるだろう。** ・　運動会の組体操 ・　お楽しみ会 ・　幼稚園との交流 ・　運動会の役割	・　それぞれが果たしている役割も活動全体の成功につながっていることが感じられるようにする。	
終末	４．ビデオを見る。	**○　幼稚園から送られてきた交流会についての感想を話しているビデオを見てみよう。**	・　自分たちが役割を考え、交流会を成功させるために責任を果たしたことへの感想を聞かせる。	ビデオ

ii　授業を振り返って

以下に児童の授業後の振り返りを示す。

・　役割は好きだからがんばるとか、嫌いだからやらないとかじゃなくて、みんなのことを考えて、きちんとやり遂げなければならないことなんだなぁと思いました。
・　自分のやりたい役割ができないことなんて、よくあることだと思います。だけど、そのことを悔やんでいないで、自分の役割を責任をもって最後までやり遂げたら、きっとみんなも自分も気持ちがいいんだと思いました。
・　自分のことばかり考えていると、自分だけがやりたいことをできなかったように思ってしまうけど､他にもやりたかった役ができなかったのに頑張っている人がいるということに｢えり子」は気付いたんだと思いました。劇も「みんなの劇なんだ。」ということを大切にしなければいけないと思いました。

この授業を通じて、普段から行っている役割や仕事が、周りの人のためになっているこ

とや周りの人に喜ばれることなのだということを児童は実感したようである。役割に対して「しなければならないから」「することが当たり前だから」という意識だけでなく、主体的に役割や責任を果たすことに対する意欲が高まったように感じられた。

授業の反省点としては、立ち止まってみんなで考え合うという場面を十分にもてなかったことが挙げられる。展開の中の三つめの発問では「文男は本当は嫌々していたんじゃないの？」と、主発問では「まだ女王役をやりたい気持ちがあったんじゃないのかな？」、「何に気付いたから頑張ろうと思ったのかな？」などと揺さぶりをかけることができていれば、役割を自覚して自分の責任を懸命に果たそうとした主人公の気持ちをより深く考えさせられることができたであろう。そうすれば、集団の中での役割を自覚し、責任を果たすことの意義を自分なりの言葉で発言することにつながり、道徳的価値への理解をより深められたのではないかと考える。また、「みんなのために」という言葉が児童から出されたが、「みんな」とは誰なのかということ（クラスのみんな、見てくれる人、自分自身）を考え合うことも、より深く集団を意識し、役割や責任について考えさせることにつながったのではないかと思われる。

ウ　成果と課題

(ｱ) 学校全体としての道徳教育の取組についての成果と課題

成果としては以下の２点が挙げられる。

１点目は、学校全体として道徳教育が円滑に推進できるよう、学校の規模を考慮に入れた推進体制を構築したことが挙げられる。これにより、道徳教育推進のための具体的な連絡経路や相談経路ができ、年間計画作成に関わる打合せやアンケート内容の検討、体験活動との関連についての相談など、事案によって臨機応変に取り組むことができた。

２点目は、先述した推進体制の下、道徳教育推進教師を中心に様々な取組を行ってきたが、その中で教職員の道徳教育に対する意識の向上を感じられたことである。７月のアンケート調査では、「学校全体で道徳教育に取り組んでいるとはいえない。」というような意見もあったが、２学期末に意見交流した際には、「全員で道徳の研修をもてたことはとてもよかった。」「道徳の時間をもっと工夫したり、研修を積んだりすることが必要だという自覚が深まった。」というような意見が出され、意識の向上がうかがえた。

課題としては、年度が変わり、人員の変更や組織、分掌の改編等が行われる中、現在の推進体制を継続・充実させていくことが挙げられる。また、具体的な取組の中では、各教科等との関連をより意図した道徳教育年間指導計画の立案、作成等が、今後の検討課題として挙げられる。

(ｲ) 規範意識の向上を目指した第５学年の取組についての成果と課題

この実践の後、アンケートをとり、９月と11月で意識の変化を見た。

図10からも分かるように、「５　自分の役割や仕事をしっかりすることが大切だ」に「そう思う、どちらかと言えばそう思う」と答えた児童の割合は授業後の回答でも100％を維持することができた。また、「６　役割や責任を果たすことで、自分もみんなも気持ちよく過ごせる」に「どちらかと言えばそう思わない」と回答した児童が2.4％から０％となり、「15　学級の係や当番を進んでしている」や「16　委員会や学校行事などの仕事に進んで取り組んでいる」に「そう思う、どちらかと言えばそう思う」と回答した児童の割合がどちらも約５ポイント上昇するなど、規範に関する意識の低かった児童においての高まりが見られた。

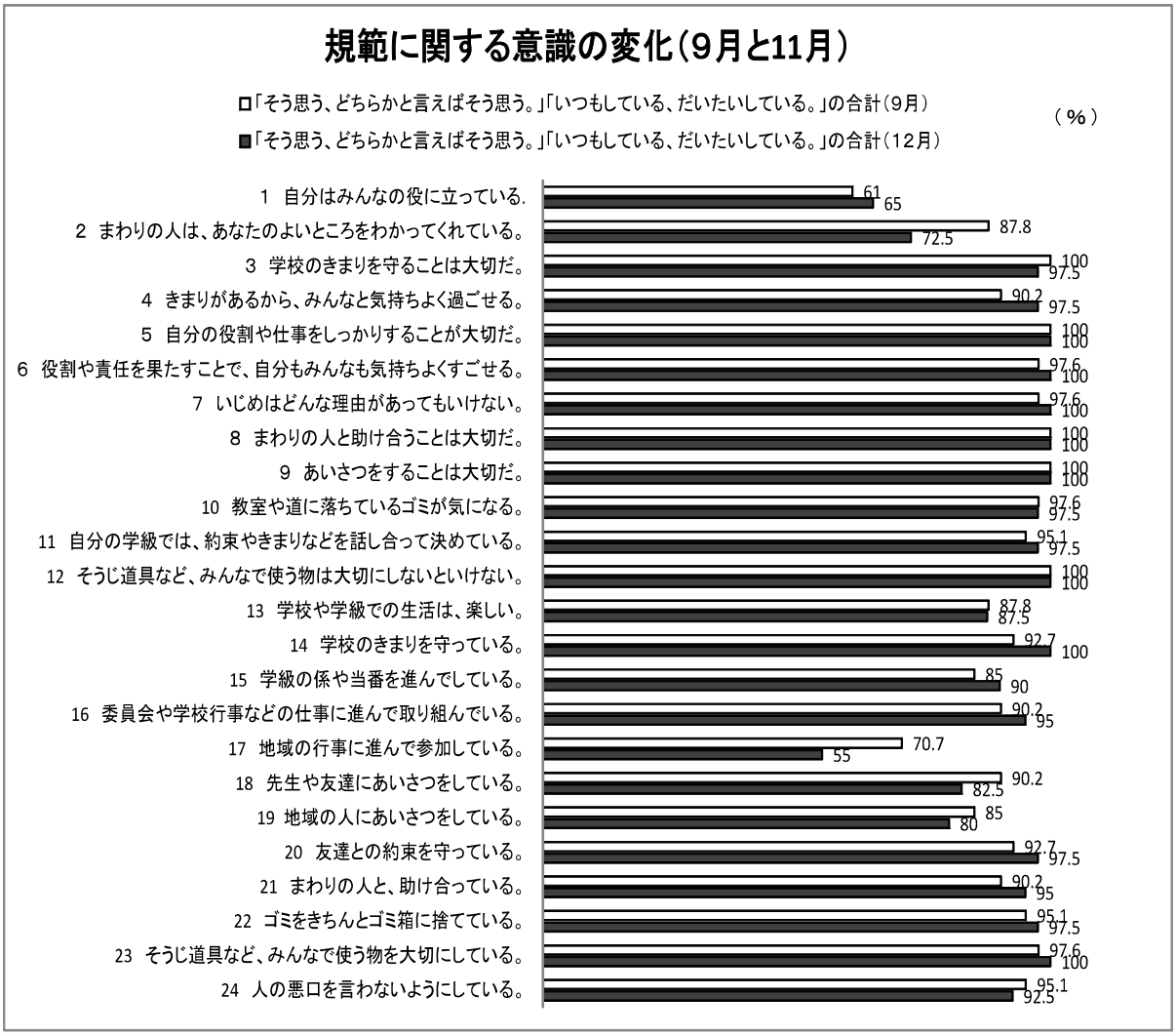


図10　新庄北小学校第５学年を対象としたアンケート調査の結果（９月と11月の比較）

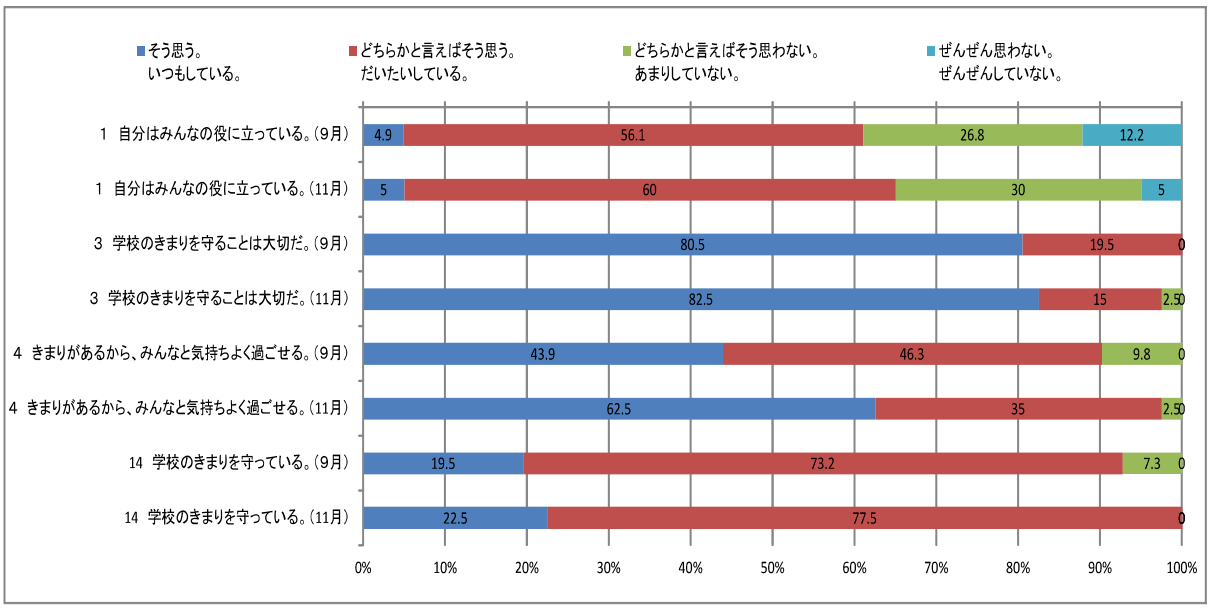


図11　新庄北小学校第５学年を対象としたアンケート調査の結果詳細（９月と11月の比較）

さらに詳細な結果としては、「１　自分はみんなの役に立っている」では「ぜんぜん思わない」と回答していた児童が12.2％から５％に減少した。また、「４　きまりがあるからみんな

と気持ちよく過ごせる」に「そう思う」と答えた児童の割合は、43.9%から62.5%と18.6ポイントの上昇が見られた。また、「3　学校のきまりを守ることは大切だ」ではもともとの意識が高く、あまり変化は見られなかったが、「14 学校のきまりを守っている」では高まりが見られた（図11)。また、きまりを守ろうと考える理由を自分なりの言葉で表現しようとする児童が増え、「守ると気持ちよくなるから。」「ほめられるからじゃなくて心がすっきりする。」など、きまりを守ることの大切さを感じ取れている児童や、「みんなが勝手なことをしてはいけないから。」「ルールを守ると自分も他の人も気持ちよく過ごせるから。」など、集団を意識することができている児童が増えた。

表２　「14 学校のきまりを守っている」の回答理由（９月と11月の比較）

14　守れている人の考え	守らないと先生や家の人におこられるから。	守ると先生や家の人にほめられるから。	みんなが守っているから。	守ることは当たり前だから。	守ることは大事だから。	その他。
９月	0	2.6	2.6	21.1	68.4	5.3
11月	0	2.5	2.5	35	35	25
「その他」の理由(9月)	・守らないと誰かが傷付くから。　・安全に過ごせるから。					
「その他」の理由(11月)	・守ると気持ちよくなるから。（スッキリするから。） ・ほめられるからじゃなくて心がすっきりする。 ・守ると達成感を感じるから。 ・みんなが勝手なことをしてはいけないから。 ・ルールを守ると自分も他の人も気持ちよく過ごせるから。 ・できることをやる。 ・ルールなどはきちんと守らないといけないから。　など					
14　守れていない人の考え	守らなくても先生や家の人におこられないから。	守ってもだれにもほめられないから。	みんなが守っていないから。	守らないといけない理由が分からないから。	守らなくてもだれにも分からないから。	その他。
９月	0	66.7	0	0	0	33.3
11月	0	0	0	0	0	0
「その他」の理由(9月)	・ちょっと調子に乗っているから。					
「その他」の理由(11月)						

これらのことから、本取組を通して、役割や責任を果たす意義についての理解が深まるとともに、約束やきまりの意義についての理解も深まり、きまりを守っていこうとする意識が高まっていることが見て取れた。

本取組を通して、「4　きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる」などの項目で、「どちらかと言えばそう思わない」、「ぜんぜん思わない」と回答した割合が減少したことからも分かるように、学級全体として規範に関する意識の高まりが見られ、一定の成果は認められた。しかしながら、アンケート調査の結果において、全般的に「どちらかと言えばそう思う・だいたいしている」から「そう思う・いつもしている」への変容が少なく、規範に関する意識の理解の定着は十分に高められなかったことが反省として挙げられる。特に「5　自分の役割や仕事をしっかりすることが大切だ」、「6　役割や責任を果たすことで、自分もみんなも気持ちよく過ごせる」、「16 委員会や学校行事などの仕事に進んで取り組んでいる」では「そう思う・いつもしている」と回答した割合が減少し、「どちらかと言えばそう思う・だいたいしている」と回答した割合が増加しており、役割を自覚し責任を果たすことの意義について、一定の理解はなされているが、深められたといえる状況ではないことがうかがえる。これは、「授業を振り返って」の項でも述べたが、道徳の時間の学習において、もう一歩踏み込んだ形の指導が十分でなかったためではないかと思われる。

今後も道徳的価値のもつ意味や大切さについて、深く考えられる道徳の時間の指導の在り方を模索していきたいと考えている。

(2)　規範意識を高める道徳教育の取組～香芝市立旭ケ丘小学校での取組～

県と同様に、本校においても規範意識の向上は道徳教育全体計画の中で重点目標に挙げている。今年度、学校全体の協力体制での道徳教育の取組の更なる充実を目指して取り組んだ。

ア　道徳教育推進教師を中心とした学校全体としての取組

(ｱ) 道徳教育推進教師の役割及び道徳教育推進体制

校長の方針の下に、全教育活動を通じて行う道徳教育推進の中心的役割を担うのが道徳教育推進教師である。その際、道徳教育推進教師が一人で道徳教育を進めるのではなく、学校全体の協力体制で行うことが重要である。本校は、全校児童1300名を超える大規模校である。学校全体での取組となるよう、教務主任、研究主任との連携を図るとともに、各学年部において道徳担当者を決め、それぞれの連携を重視した推進体制を構築し、以下の役割を果たしていった。

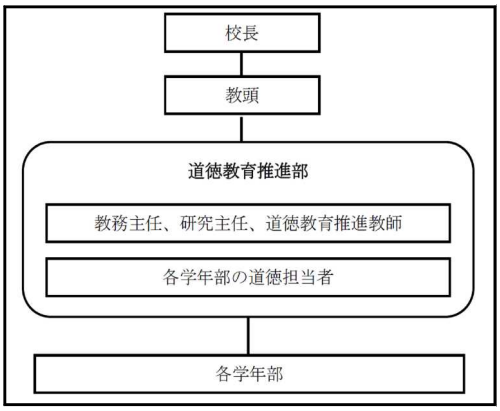


図12　校内道徳推進体制

- 児童の実態を把握するアンケート調査の分析を行い、学校全体での道徳教育を行うための指導に生かす。
- 教務主任、各学年部の道徳担当者と連携して、道徳教育年間指導計画を作成する。
- 研究主任と連携し、教職員の道徳教育への意識の向上や道徳の時間の指導の充実につながる道徳教育の研修を行う。
- 道徳教育の取組を家庭や地域へ伝える。
- 児童の道徳心を涵養（かんよう）する取組を学校全体で行う。

(ｲ) 取組の具体

a　本校の児童の実態について

前年度に実施された「平成23年度奈良県学習状況調査」から本校第６学年児童（250名）の規範に関する質問事項の集計結果を分析した。

①「学校のきまりを守っていますか」という問いに対して、「当てはまる」や「だいたい当てはまる」と回答した児童の割合は、県平均と同じくらいであるが、「当てはまる」と回答した割合は22.8％と、県平均（27.5％）を大きく下回っていた。
②「友達との約束を守ろう」とする意識は99.2％と、とても高い。
③「地域の人にあいさつはできているか」という問いに対しては84.1％で、県平均(86.9％)をやや下回っている。
⇒児童が学校のルールを守っていこうとする意識は、十分高いとは言えない。
⇒個人的な約束は大切にするが、学校や社会などの集団との約束となると意識が低くなっている。
⇒あいさつは人と人との関係を築く基本的な礼儀であると考えたとき、社会や地域の様々な人との関係を築いていこうとする意識に課題を感じる。

さらに、本年度、全校児童にアンケート（Ｐ20で詳述）を行うと、ほぼ同様の結果が得られ、各学年の児童の実態と課題が明らかになり、規範意識に関する今後の指導に生かすことを確認した。

b　教員に対するアンケートについて

児童と同様に、教員に対しても「規範意識を高めるための取組」についてのアンケートを行った。「規範意識を高める手立て」に関する質問では、「学級の雰囲気をつくること」や「集団の中で役割や責任を果たすことの喜びを感じさせること」が大切だと回答した教員の割合が高かった。しかし、「規範意識に関わる取組」に関する質問から、学校全体での道徳教育の取組、児童自身がきまりを考えたり、作ったりするような活動をさせる取組については不十分だと感じている実態が明らかになった。

図13　規範意識を高める手立てに関する教員の意識

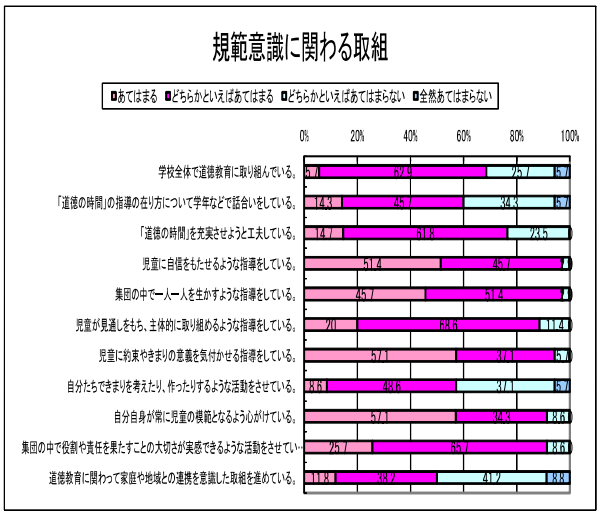


図14　規範意識を高める取組に関する教員の意識

そこで、道徳教育全体計画の中に、重点目標の一つとして挙げている「よく聴き、よく考え、自分の力で判断し、約束やきまりを守って行動できる子どもを育てる」ことに向け、取組をより充実させていくことを再確認した。

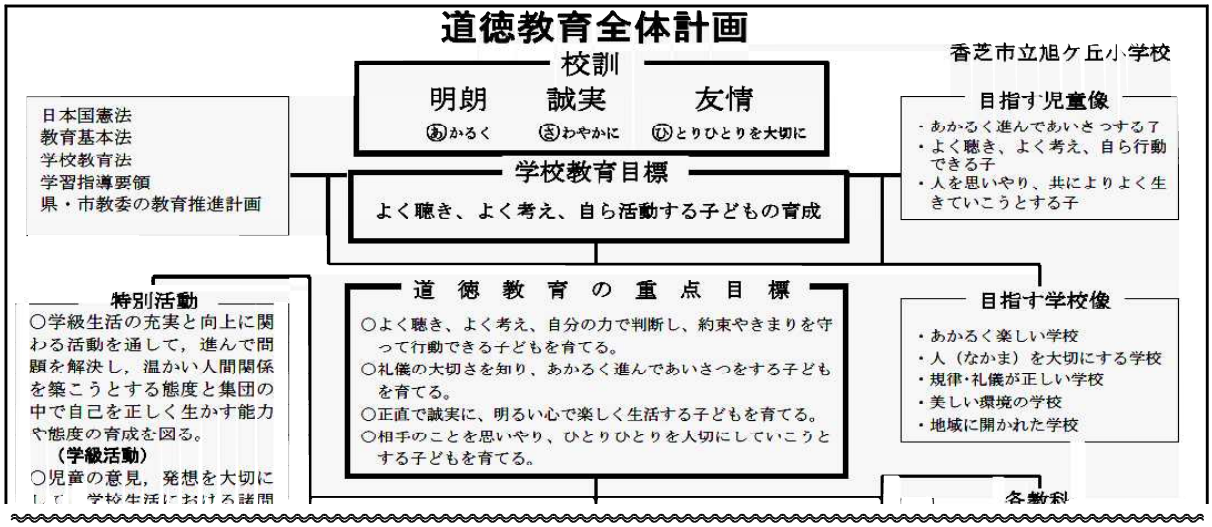


図15　平成24年度　道徳教育全体計画

c　道徳教育に関する研修

i　道徳教育に関する研修の実施

夏期休業中に研究指導主事の支援を得て研修を行った。研修内容は、事前に各学年の道徳担当者と協議し、「規範意識のとらえ方と意識を高めるための手立て」と「道徳の時間の指導の工夫」とした。教員に対するアンケートでの自由記述に「道徳の授業への取組や姿勢が各クラスで違う」や「道徳の授業での指導力不足を感じる」とあり、道徳の時間の指導のスキルアップを望む声が多かったため、道徳の時間の役割、指導案の作成、資料の

活用、発問の工夫などについて研修し、多くの教員が道徳教育に対する理解を深めることができた。

ⅱ　授業を通した研修の実施

本校は大規模であるため、全ての教職員が一度に教室に入ることができず、満足な授業参観が難しい。そこで、機会を増やすことで、研修の充実ができないものかと考えた。

２学期には、奈良県道徳教育研究会の研究授業も兼ね、「星野君と定金君」(高２-(3)信頼・友情　文渓堂『５年生の道徳』)を資料として用いた道徳の時間の授業公開を行った。授業後の研究協議を県道徳教育研究協議会の方々と共に行い、授業の展開、板書の工夫、発問の仕方、児童の思いの聴き方や返し方など、実践的なことを中心に協議した。参加した教員からは、「今まで自分がやってきた道徳のやり方と全然違う。」や「もっと、いろいろなやり方を知りたい。」など、前向きな声を聞くことができた。また、同学年の他のクラスで同じ資料を扱い研究授業前に行った授業も自由参加という形で公開した。

さらに、本プロジェクト研究として行った道徳の時間の授業も公開し、(詳細はＰ23)授業後には、全体研修として授業の研究協議、及び、道徳の授業についての研修を研究指導主事の支援を受けて行った。

ｄ　家庭・地域への発信

学校通信「旭ケ丘小だより」(年10回発行)やPTA新聞「サンライズPTA」(年４回発行)、学年だより（月１回発行）などを通して、取組の様子や児童の学習の様子を保護者や地域の方に向けて発信している。本校では、挨拶を通して、児童の心を育むことや地域の人たちとのつながりを深めることをねらいとして、全校体制で「あいさつ運動」に取り組んでいることもあり、挨拶の大切さや児童の活動の様子を積極的に配信している。

◎学校通信『旭ケ丘小だより』No.８より抜粋

先日、学校に一通のお手紙が届きました。子どもたちをほめていただくようなお手紙が届くのは久しぶりでありましたので、早速先生方にも紹介をしました。「うれしいですね、このような温かい思いで子どもたちを見ていてくださる地域の方がおられることが・・・」と、お手紙の温かさが染み込んでくるようでした。今後の指導の中にこの温かい挨拶の輪が広がっていく取組をしていけるよう、ますます精進してまいりたいと思います。

＜手紙の内容＞

毎朝７時ごろ裏手の道でマラソンをしている小学生の兄弟に会います。低学年と高学年ぐらいの兄弟です。近所のお子さんと思いますが大変感心なお子さんたちです。仲良くマラソンをしながらとても気持ちよく大きな声で挨拶をしてくれるのです。私ばかりではなく私どもの病院のスタッフにも同じようにしてくれるようです。大人の私たちが恥ずかしくなる思いです。最近では私たちも毎日会って挨拶を交わすのを楽しみにしております。御家庭の方と先生方の教育のたまものと思います。是非このことを知っていただきたく不しつけながらお手紙をさせていただきました。

ｅ　学校全体で道徳心の涵養を図る取組

道徳教育推進教師と各学年の道徳担当者が中心となって話し合い､取り組んでいるのが、「あいさつ教材を活用しての授業」と「お話資料の視聴」である。

「あいさつ教材を活用しての授業」では、道徳教育推進部で年度始めに各学年に応じた教材を用意し、それぞれの学年は実態に応じた教材を選び授業を行った。「お話資料の視聴」は、年間計画をもとに道徳用DVDを利用し、学年ごとに朝の時間を利用して視聴する

もので、感性に響き、感動を覚えられるような様々なお話と出会う機会を増やし、道徳心の更なる涵養を目指している。視聴後は各担任が資料の内容についての話合いをできるだけもつようにした。

2012年度 お話資料年間視聴計画

	1学期				2学期								3学期			
1年	6月	5	火	ニわのにわとり 信頼・友情	10月	2	火	ちいさいちいさい手をつないで 自然愛護	11月	1	木	ともだちほしいなおおかみくん 信頼・友情	1～2月	15	火	こびとといもむし 思いやり・親切
2年		7	木	こぎつねコンとこだぬきポン 信頼・友情		4	木	金のおの 正直・誠実		6	火	おじいちゃんのたからもの 勇気		17	木	金の小鳥 思いやり・親切
3年		12	火	金色の魚 節度節制		9	火	ひさのほし 敬虔		8	木	りゅうの目のなみだ 思いやり・親切		22	火	きりの中のぶらんこ 思いやり・家族愛
4年		14	木	金色の足あと 動植物愛護		11	木	くもの糸 敬虔		13	火	クジラのハンフリー 動植物愛護		24	木	杜子春 節度節制・家族愛
5年		19	火	二度と通らない旅人 思いやり・親切		16	火	銀のしょく台 寛容・謙虚		15	木	たんぽぽの金メダル 不撓不屈		29	火	最後のひと葉 思いやり・親切
6年		21	木	どろんこサブウ 自然愛護		18	木	青の洞門 敬虔・不撓不屈		20	火	六千人の命のビザ 公正公平・正義		5	木	走れメロス 信頼・友情

図16　2012年度　お話資料年間視聴計画

イ　規範意識の向上を目指した第６学年の取組

(7) 本学年の実態と分析

９月に「規範に関する意識アンケート」を本学年児童に対して実施したところ、以下のような結果であった。

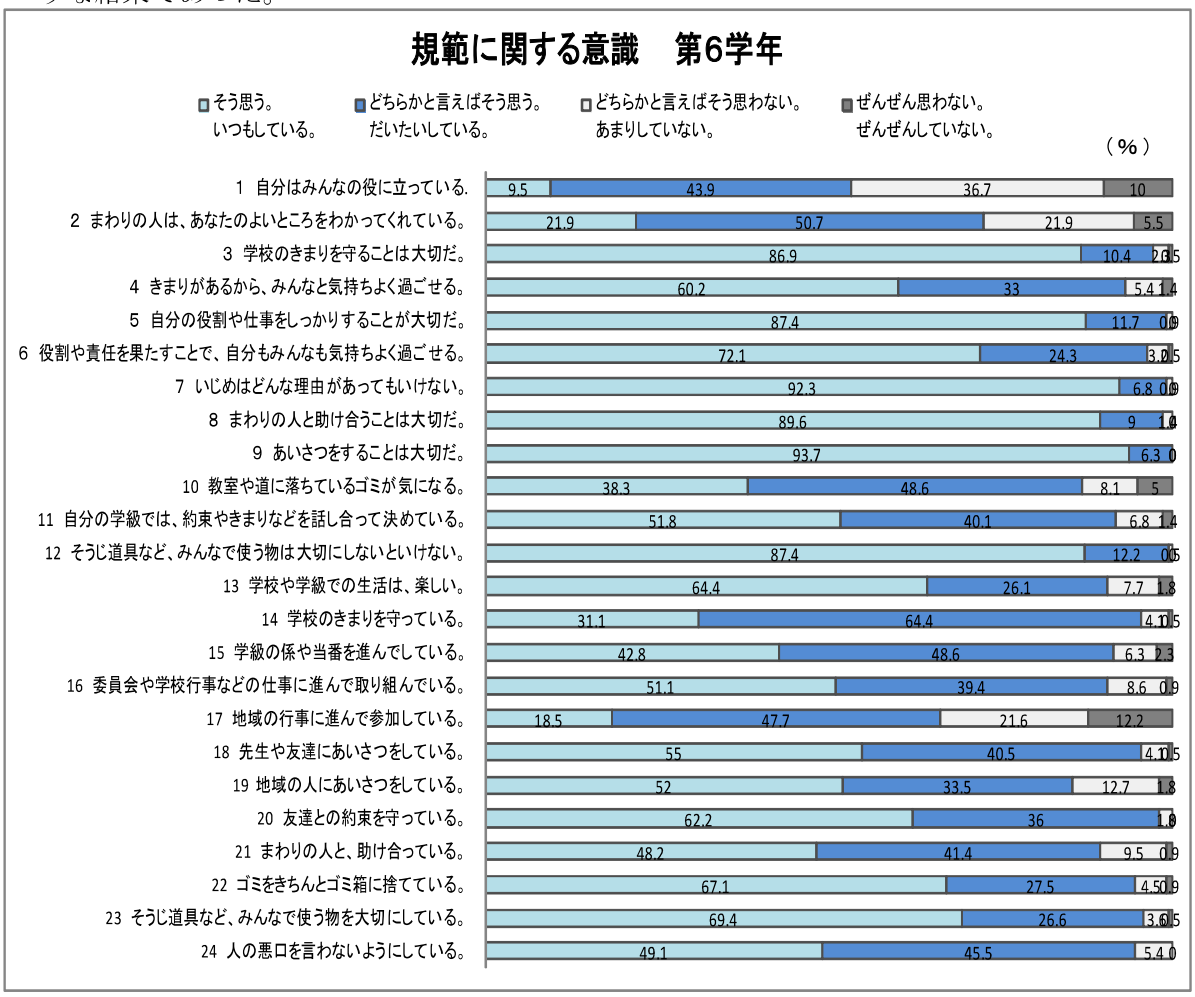


図17　第6学年を対象としたアンケート調査の結果（9月）

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計の数値が、多くの項目で約９割となっており、今回は「そう思う」の数値での分析を行った。

① 「５ 自分の役割や仕事をしっかりすることが大切だ」と答えた児童の割合は高いのに対し(87.4%)、「１ 自分はみんなの役に立っている」と「２ まわりの人は、あなたのよいところを分かってくれている」、「15 学級の係や当番を進んでしている」という項目では低い割合となっている。(9.5%と21.9%、42.8%)

② 学校のきまりを守ることの大切さについては理解しているが(86.9%)、実際に「学校のきまりを守っている」と答えた児童の割合は低い(31.1%)。「なぜ守るのか」の問いに対しては、「守らないとおこられるから」とした児童が１割近くおり、「守ることは大事・当たり前」と答えた児童は77.7%となった。「守れていない」と答えた児童は、「守らないといけない理由が分からない」と「みんなが守っていないから」、「先生や、家の人におこられないから」などがあった。

③ 「友達との約束は守っている」では、「そう思う」と答えた児童が多かった。(62.2%)

これらのことから、まず、大半の児童は、約束やきまりの大切さをある程度は理解していることがうかがえる。しかし、友達との約束に比べ、学校などの約束やきまりへの意識は低く、約束やきまりは大切だという思いを実際に行動に移すところまでは至っていない。

次に、役割や責任を果たすことの大切さはある程度理解できているが、学級の係活動や当番を進んで行うことはできていない。

また、「自分はみんなの役に立っている」や、「よいところをわかってくれている」の項目が低いところから、集団や社会の中での自分の存在感や有用感を感じられていないようである。

これらのことから、集団の中の役割を責任をもって果たすことの意義について、より主体的な理解を図る取組により、集団の中における人間関係を維持向上しようとする心を育むこと、ひいては、約束やきまりを守ろうとする意識の向上につなげていくことの必要性を感じた。

表3 「学校のきまりを守っている」の質問項目での回答理由

守れている人の考え	守らないと先生や家の人におこられるから。	守ると先生や家の人にほめられるから。	みんなが守っているから。	守ることは当たり前だから。	守ることは大事だから。	その他。
9月	9	3.3	3.3	29.4	48.3	6.6
12月	5.2	0.5	2.8	35.1	50.7	5.7
9月	・他のみんなも、低学年の子も守ってくれるから。 ・みんなが学校で気持ちよく過ごせる ・なんとなく ２ ・けがをすることが少なくなる。 ６ ・無意識にやっている。 ・守るとみんなが真似をする。 ・ふつうに。					
守れていない人の考え	**守らなくても先生や家の人におこられないから。**	**守ってもだれにもほめられないから。**	**みんなが守っていないから。**	**守らないといけない理由が分からないから。**	**守らなくてもだれにもわからないから。**	**その他。**
9月	10	0	10	30	0	50
12月	25	0	12.5	12.5	0	50
9月	・だるいから。 ・廊下をつい走ってしまう。 ・しばられるのはいや。 ・何とも思わない。 ・場合による。					

(ｲ) 具体的な取組

次のような流れで、学年全体で共通理解を図りながら取組を進めた。

①第６学年児童の実態の把握（アンケートの実施・分析） ９月
②体験活動（あいさつ運動・体育科「フラッグフットボール」） 10月～11月
③道徳の時間「どこかでだれかが見ていてくれる」の学習 11月
④事後の指導 （学級活動・体育科「ドッジボール」など） 11月～12月
⑤児童の意識の変容の把握 （アンケートの実施・分析） 12月

a　役割を自覚し責任を主体的に果たす体験活動を通して

i　あいさつ運動を通しての取組

１学期末に実施した「よりよい旭ケ丘小学校をつくるために」と題したアンケートで次のような結果が出た。「みなさんは６年生として、旭ケ丘小学校をどんな学校にしていきたいですか」の質問項目に対し、全体の85％の児童（205名中）が、「あいさつあふれる学校にしたい」と回答した。そこで、２学期より各クラス（全６クラス）から２名ずつあいさつ推進担当者を選び、あいさつ運動の目標「日本一のあいさつを目指して」とその達成のために必要な役割と活動を自分たちで話し合っていくこととなった。休み時間を中心にあいさつ推進会議をもった。

◇決定した活動内容

★あいさつひろめ隊

１～５年の各クラスに、紙芝居や歌、劇、ポスター、あいさつだよりなどを用いて10分～15分程度で、挨拶のよさや大切さを伝え、一緒に挨拶をしていこうと呼びかける。

★作成班

あいさつひろめ隊のメンバーが、呼びかけに必要なもの（紙芝居・ポスター・あいさつだよりなど）を作成する。

★全校あいさつ運動班

１～５年生から各クラスの自主的参加者と６年生の各クラスが日替わりでペアとなり正門前での朝の「あいさつ運動」を行う。全学年の全クラスが一度は朝のあいさつ運動に参加することを目標とする。

★あいさつビデオ班

挨拶の仕方、よさを伝えるビデオを作成し、給食時間に全校に流す。また、１階フロアにテレビを設置し、休み時間にそのビデオを放映する。

※　それぞれの班が活動する際に気を付けたことは、これらの活動が相手に対して押し付けにならないようにすることである。「一緒にあいさつをしていこう」という姿勢を大切にすることと、それぞれの班のメンバーは、ペアとなるクラス、訪れるクラスの担任と児童に対し、事前の呼びかけと事後のお礼を必ず行うことを話し合い、決めた。

当初、活動に対して消極的な児童もいた。しかし、朝の正門前でのあいさつ運動や各クラスへのあいさつを広める活動など、それぞれが役割をもち、責任を果たすため、お互いが声を掛け合う中で、そういった児童も徐々に意欲的に取り組むようになった。他の児童の姿から役割と責任を果たすことの大切さに気付いていったからではないかと思う。また、この取組により６年生のあいさつを広める活動への理解が広がり、他の学年の児童が自主的に朝の正門前でのあいさつ運動に参加するようになった。多いときは、200名の児童と20名の教師が正門前に立つことがあった。

あいさつ運動の振り返りの中で、多くの児童が、「みんなで班を決めて、その役割を積極的にがんばれたので、１～５年生の人たちにあいさつ運動を広めることができた。この活動をこれからも続け、日本一のあいさつのできる学校にしたい。」という意見を書いており、自分の役割と責任を果たすことへの児童の意識の深まりを感じた。

ii　体育科の学習「フラッグフットボール」を通しての取組

フラッグフットボールは、相手にタグを奪われないように、タッチをかいくぐりながら、相手のエンドゾーンまでボールを運ぶゲームである。体をぶつけ合うことや、複雑なパス

回しなどが少ないため、簡単に取り組める。フラッグフットボール協会の公式ルールに則って行ったが、道徳教育の観点からは、児童がお互いの役割を意識し、協力することができているかどうかということを重視した。

最初は、簡単なルールだけを説明しプレーをさせた。当然のことながら、プレーはちぐはぐで、力任せにボールを運ぼうとし、全くうまくいかなかった。そこで、ポジションとそれぞれの役割、作戦の立て方、そして、このスポーツの最大の特徴である「ハドル」とよばれる作戦会議について教えた。児童は様々な角度から話合いをし、数多くの作戦をワークシートに作り、試合に臨んだ。試合前と各攻撃前に必ず「ハドル」を行うことで、試合の内容が以前とは大きく違ったものとなっていった。それからは、試合を重ねるたびに、お互いの役割が明確化し、それぞれの特徴に合わせたポジションを設定し、みんなで考えた作戦を試す、ということができるようになった。

児童は「初めてするスポーツということもあって、戸惑いましたが、それぞれに役割があり、みんなと話し合いながらプレーができるので一体感があって面白いです。また、３学期もみんなとやりたいです。」、「スポーツが苦手な私は、今までの他のスポーツではほとんどやることがありませんでした。でも、フラッグフットボールでは、みんなで話し合い、作戦と役割を決めてプレーできるので、私にもできることがあってとても楽しかったです。」などと感想を記している。一部の得意な児童だけが活躍するのではなく、それぞれが役割をもち、その責任を果たすことがなぜ大切なのかということを実際にチームに貢献することを通して実感できたのではないかと考える。

b　道徳の時間を通して

ｉ　授業の実際

○主題名　自分がやらなければならないことを（内容項目　高４―（３）役割・責任）

○資料名　どこかでだれかが見ていてくれる―福本清三―（出典『5年生の道徳』文渓堂）

○資料について

本資料は、時代劇映画の中で「きられ役」を40年以上演じ続けた俳優、福本清三さんの話である。ある時、福本さんは、映画は主役だけで成り立っているのではない、端役といえどもそれぞれに重要な役割があり、よい映画を作るためには欠かせない一人なのだということに気付く。そこから自分の役割を自覚し、努力を重ね、独自のきられ方を考案する。こうした、福本さんが自分の役割の大切さを自覚し、その役割を果たすために努力を重ねたときの思いを考えることで、本時のねらいに迫りたい。

○本時のねらい

集団の中で自分の役割を自覚し、主体的に責任を果たそうとする態度を養う。

○展開

	学習活動	主な発問と実際の児童の反応	指導上の留意点	備考
導入	１．福本さんの写真を見せる。	**○この人を知っていますか。**	・福本さんに興味をもたせる。	写真
	２．資料「どこかでだれかが見ていてくれる」を読んで、話し合う。	**○「きられ役」の専門の俳優として、休む間もなく、かけ回る福本さんはどんなことを考えていたでしょう。** ・出られるだけ嬉しい。 ・主役もやってみたいな。 ・面白くないけど、人のため、自分のため	・最も輝く主役とは対照的に、台詞もなく、顔さえもはっきりと画面に映ることがない端役をやっている時の福本さんの思いを想像させる。	

展開		にできることを精いっぱいやろう。 **○萬屋さんの言葉を聞いて、はっとした福本さんはどんなことに気付いたでしょう。** ・こうやって見ていてくれる人がいるなら頑張ろう。 ・いつも地味な役だけど、映画には欠かせない役なんだな。 ・必死にやっていたが、芝居をしている気持ちにはなっていなかったな。 ・大物の俳優さんも見ていてくれたんだ。 **◎福本さんは主役がかっこよく見えるきられ方の工夫をしていたとき何を考えていたでしょう。** ・端役がいるから面白い映画ができるんだ。見てくれている人たちに喜んでもらえる映画を作ろう。 ・見る人に楽しく見てもらいたいから精いっぱいやろう。 ・端役も大切な役なんだから、主役と同じように演技をしなければいけない。端役は台詞もなく目立たないけど、せめて主役だけでも目立たせることが自分の仕事だ。 ・今まで、端役ばかりやってきて、もっと目立つ役もやりたいと思ったけど、端役も映画には欠かせない役だから、どうせなら主役がかっこよく見えるきられ方をしたほうがいい。 **○「どこかでだれかが見ていてくれるんやな」という言葉には、福本さんのどんな思いが込められているでしょう。** ・主役だけではなく、自分も見られていたんだ。 ・一生懸命、精いっぱいやってきてよかった。 ・きられ役は目立たない役なのに、どうして世界の舞台から誘いが来たのだろう。	・萬谷さんの言葉で、主役だけで映画が成り立っているのではなく、自分も必要な俳優の一人なのだと気付いた福本さんの思いに気付かせる。 ・何のために工夫を重ねたのかを考えさせる。自分も映画を作るために必要な俳優の一人なのだと自分の役割に誇りをもち、努力を重ね、その責任を果たしたことが、いい映画を作ることにつながったのだという福本さんの思いに迫らせる。 ・44年という長い時をかけてやっとつかみ取った大役の影には、福本さんの必死の努力があったことをおさえておく。	ワークシート
終末	3．教員の話を聞く。		・余韻を残して終われるようにし、より実践意欲を高められるようにする。 （教員の学生時代の体験談を話した。）	

ii　授業を振り返って

福本さんの姿を通して、児童は、自分がやらなければならないことを責任をもって果たすことの大切さを学んだ。一見すると目立つ主役の存在を注目しがちであるが、その陰には、多くの人たちの努力と支えがある。主役だけでなく、映画に関わる全ての人がそれぞれの役割を果たすことによって映画は成り立っている。それは、児童の日常生活にも当てはまる。どの役割も、その役割がなければ成り立たず、それぞれの役割をきちんと自覚し、責任を主体的に果たしていくことは、自分もみんなも楽しく、気持ちよく過ごせることにつながることを学ぶことができたようである。学習後に書いた、道徳の時間の振り返りシ

ートにもそのことが表れている。

○今日、私は目立つばかりじゃなくて、陰でみんなを支えることも大切であるということと、そういう役割の人たちのおかげで、自分がやりたいことができているということが改めて分かりました。 ○道徳の時間で、きられ役がいるから主役が成り立っていることが分かりました。サッカーに置き換えて考えると、主役はトップで、端役はディフェンスとなります。僕はディフェンスです。僕はトップがうらやましくて、トップになりたかったけど、今日の道徳の時間で、ディフェンスがいるから、トップが成り立っているんだと分かりました。ディフェンスもいいもんだなと思いました。 ○私が授業で学んだことは、自分が目立たないことをしないといけないとしても、それは必ず誰かのためになっていて、それを果たさなければいけないということです。これからは、自分の役割を、しっかり果たしていこうと思います。 ○今日の授業で分かったことは、主役だけで成り立つものではないということです。僕は今まで一番目立つ役（主役）しか面白くないと思っていましたが、今日の授業を受けて、端役がいないと成り立たないということがよく分かりました。これからは、どんな役でもがんばっていきたいです。

授業の反省点として挙げられるのは、板書計画に沿って授業を意識しすぎたことである。もっと、児童が話し合える時間を確保すべきであった。それぞれの場面での登場人物の気持ちなどから考えた児童の意見を生かしながら、板書することを心がければ、より板書と児童の意見が一体化し、ねらいにより深く迫る授業となったのではないかと思う。また、この資料の内容は、高１－(2)「努力」や高１－(6)「個性伸長」の内容項目とも関連している。そのため、児童の考えが、「福本さんの努力はすごい」「努力すれば報われる」といったものにならないように注意をしたが、何人かの児童の振り返りシートは、そういった意見でとどまっていた。授業で「福本さんが努力をしたのは何のためか」や「『どこかでだれかが見ていてくれるんやな』の『だれか』は福本さんの何を見ていたのか」などの補助発問で児童にもっときり返し、ねらいとなる道徳的価値についてより深く考えさせる必要があったと考える。

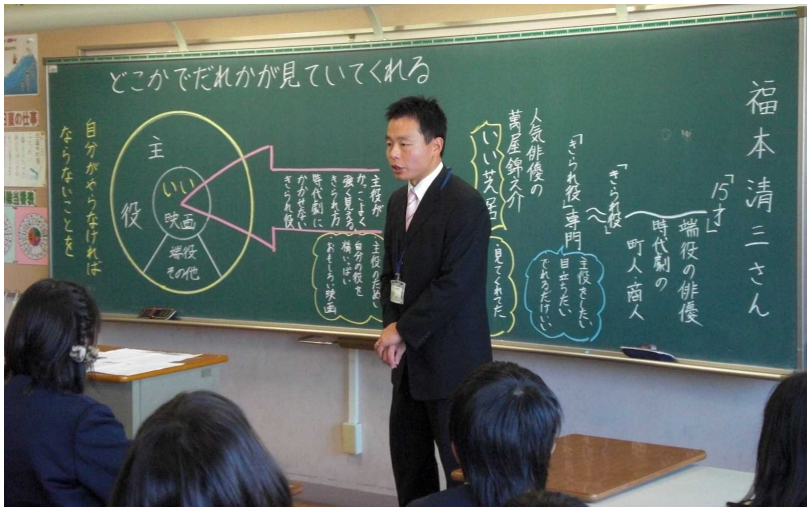


図18　授業風景と板書

ウ　成果と課題

(7) 学校全体としての道徳教育の取組についての成果と課題

本校は大規模校であるため、道徳教育の推進体制を十分に機能させていくことがより必要となる。今年度は、各学年の道徳担当者と連携を特に心掛けて道徳教育を推進したことにより、連絡事項の伝達や意見の集約、アンケートの実施などをスムーズに行うことができた。また、研修の内容の充実はもちろん、研修の機会も増やすことができた。道徳教育に関する

研修について、「道徳の時間の進め方、また、ポイントを理解することで、授業が組み立てやすくなり、中心発問の捉え方も変わった。そのことで、より深く児童に教材を考えさせられるようになり、印象に残る授業の構築が少しずつ出来るようになってきたと思う。」などの意見も出た。学校全体としての道徳教育が、着実に前進していることを実感できた。

課題としては、今回の体験活動と道徳の時間をより意図的に関連させた取組は、６年生を中心に行った取組であるため、学校全体には、まだ広めきれていない。今回の取組で得られたものを学校全体で共有し、次の年度にもつなげていかなければならないと考える。

また、全ての教職員に、道徳教育の本当のすばらしさや面白さ、必要性を感じてもらうためには、道徳の時間の授業公開や意図的な体験活動を取り入れた道徳教育の取組などの実践をさらに積み重ねていく必要がある。こうした取組が一時的なものではなく、継続的なものになり、本校に根付くよう、道徳教育推進体制についても本校にあったものを探っていかなければならないと考える。

(ｲ) 規範意識の向上を目指した第６学年の取組についての成果と課題

この実践の後、再度アンケートをとり、９月と12月の児童の意識の変化を見た。

きまりを守ることに関する「３ 学校のきまりを守ることは大切だ」「14 学校のきまりを

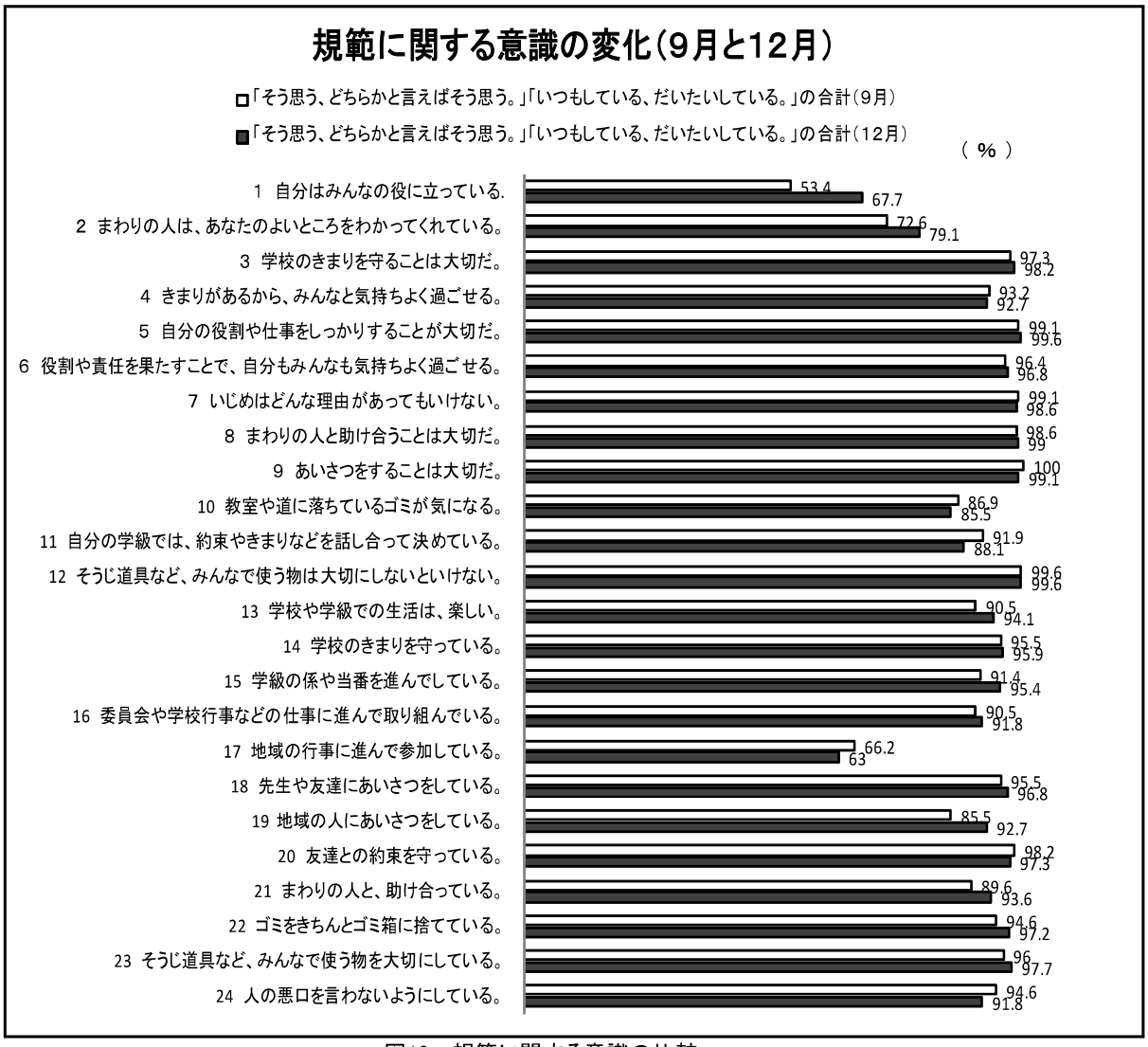


図19　規範に関する意識の比較

守っている」「４ きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる」の項目についてはどれ

も９割を越える水準で維持することができた。

そこで「そう思う」だけの回答について詳しく見ていくと、「３ 学校のきまりを守ることは大切だ」は９月の86.9％と比べると、12月は84.5％と、わずかに下回ったが、依然かなり高い数値を維持できた。また、「14 学校のきまりを守っている。」については31.1％から38.2％に上がり、「４ きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる。」については、60.2％から68.6％となっている。これは、約束やきまりの意義についての理解が深まり、約束やきまりを大切だと思っているだけでなく、実際に守って行動に移せた児童が増えてきたと考える。

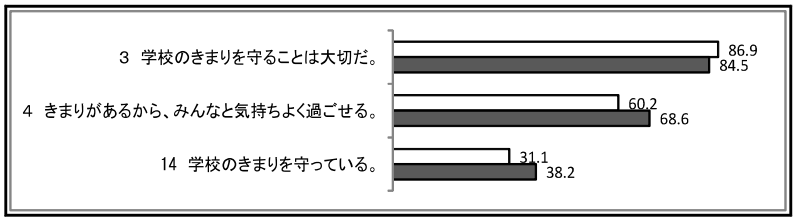


図20 規範に関する意識のアンケートで「そう思う（いつもしている）」と回答した児童の割合の変化①

さらに、体験活動や道徳の時間を通して育んできた、「役割と責任」に関する質問内容では、「５ 自分の役割や仕事をしっかりすることが大切だ」「６ 役割や責任を果たすことで、自分もみんなも気持ちよく過ごせる」「15 学級の係や当番を進んでしている。」「16 委員会や学校行事などの仕事に進んで取り組んでいる」の項目についても９割を超える高い水準で維持することができた。この項目についても「そう思う」だけの回答を詳しく見ていくと「５ 自分の役割や仕事をしっかりすることが大切だ」は87.4％から88.2％へ、「６ 役割や責任を果たすことで、自分もみんなも気持ちよく過ごせる」は72.1％から77.7％へ、「15 学級の係や当番を進んでしている」は42.8％から46.8％へ、「16 委員会や学校行事などの仕事に進んで取り組んでいる」は51.1％から58.2％へとそれぞれ上昇している。ここから、意図的な体験活動と道徳の時間とを関連させて取り組んだことで、役割や責任を果たすことの意義についての理解が深まったとともに、実際に行動に移せた児童が増えていることがうかがえる。

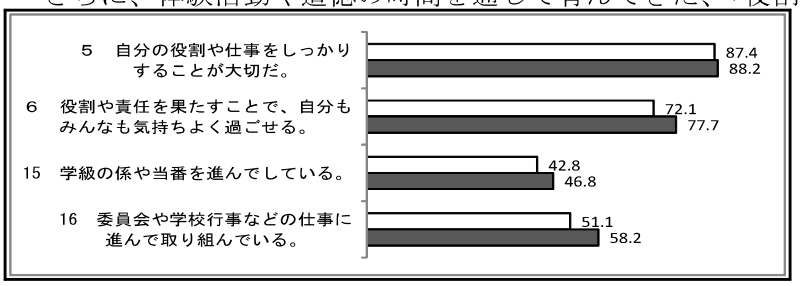


図21 規範に関する意識のアンケートで「そう思う（いつもしている）」と回答した児童の割合の変化②

これらのことから、集団の中の役割を自覚し責任を主体的に果たすことの意義の理解を図ったことがきまりを大切に思い、守ろうとする意識の高まり、つまり、規範意識の高まりにつながっていったのではないかと考えられる。

学年が一体となって取り組んだこと、学校全体で取り組んでいるという姿勢がこの意識の高まりの土台になっているのではないかと考える。学年の取組の総括では、「道徳の授業を中心とし、“自分の役割”“自分の行いの大切さ”を意識させることができた。特に、一人一人が役割と責任を意識したあいさつ運動では、自分の特性を生かしながら学校のためになる活動を自主的に考え、行動させることができた。道徳教育が全教育活動を通じて行っていることを改めて実感することができた。」という意見が寄せられた。学年が一体となり取り組めば、本校のような大規模校でも一定の成果を出せるのだということを実感した。

５　研究結果と考察

今回の研究の中で実施した児童の規範に関わる意識調査の結果をもとに、研究結果とその考察について述べる。

(1)　規範に関わる児童の意識の調査について

ア　目的

「意識」と「行動」の観点から、児童の規範に関わる意識の実態や取組を通した意識の変化等を把握し、規範意識を高める道徳教育の展開を探る参考とする。

イ　調査対象等

調査対象	葛城市立新庄北小学校児童	香芝市立旭ケ丘小学校児童
調査人数	第１学年35名、第２学年35名 第３学年34名、第４学年38名 第５学年41名、第６学年39名	第１学年180名、第２学年212名 第３学年211名、第４学年209名 第５学年239名、第６学年222名
調査時期	９月上旬(全学年)、11月中旬(第５学年)	９月上旬(全学年)、12月中旬(第６学年)
調査項目	「学校のきまりを守ることは大切だ。」等の「意識」の観点の項目及び「学校のきまりを守っている。」等の「行動」の観点の項目 高学年の全項目は、９ページを参照。	「学校のきまりを守ることは大切だ。」等の「意識」の観点の項目及び「学校のきまりを守っている。」等の「行動」の観点の項目 高学年の全項目は、20ページを参照。

※　調査は質問紙形式で、各項目に対し「そう思う（いつもしている)、どちらかといえばそう思う（どちらかといえばしている)、どちらかといえばそう思わない、(どちらかといえばしていない)、ぜんぜん思わない（していない)」の４択で回答している。

※　無記名のため、個人の変容については追跡していない。

(2)　児童の規範に関わる意識の調査の結果から

２校の取組の報告から、取組の前後で「学校のきまりを守っている」等の項目で維持又は上昇がみられ、規範意識を高める可能性がうかがえた。

ここでは、本研究仮説、「道徳の時間を要とした教育活動全体での道徳教育の取組や学校全体の協力体制での道徳教育の取組を通して、集団の中での役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義の理解を図ることが、よりよい人間関係を維持するために約束やきまりがあることの理解につながり、児童の規範意識が高まる」の検証をしていく。

方法として、「６　役割や責任を果たすことで、自分もみんなも気持ちよく過ごせる。」（以降「６　役割や責任」)、「８　まわりの人と助け合うことは大切だ。」(以降「８　人と助け合う」)、「３　学校のきまりを守ることは大切だ」(以降「３　きまりを守る意識」）及び「14 学校のきまりを守っている。」(以降「14 きまりを守った行動」）の四つの項目に着目し、今回の取組により、①役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義を理解したことが（「６　役割や責任」の項目の高まり)、②自分の属する集団での人間関係を維持、向上させようとする意識につながり（「８　人と助け合う」の項目の高まり)、③規範意識の高まり（「３　きまりを守る意識」及び「14 きまりを守った行動」の項目の高まり）まで至ったかどうかについてみていく。ここでは、「そう思う（いつもしている)」と「どちらかと言えばそう思う（どちらかといえばいつもしている)」の合計ではなく、「そう思う（いつもしている)」と回答した数値のみで分析した。

表4　「6 役割りや責任」で「そう思う」と回答した児童の中で、「8 人と助け合う」の回答でも「そう思う」と回答した児童の割合（%）

	新庄北小学校		旭ケ丘小学校	
	9月	12月	9月	12月
8 まわりの人と助け合うことは大切だ。	93.1	92.3	95	97.7
「6 役割や責任」で「そう思う」と回答した人数	29/41人	26/40人	160/222人	171/220人

表４で「６ 役割や責任」で「そう思う」と回答した児童の中で、「８ 人と助け合う」でも「そう思う」と回答した児童は、両校で９月と12月とも９割を越えていた。このことから、それぞれの役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義を理解することが集団の人間関係を維持向上させようとする意識につながっている可能性がうかがえる。また、旭ケ丘小学校で「６ 役割や責任」を「そう思う」を選んだ児童は、222人中160人から171人と取組後に増えるとともに、二つの項目でともに「そう思う」を選んでいる割合も僅かであるが増加していることから、取組により二つの意識のつながりがより深まったことがうかがえる。

表5　「8 人と助け合う」で「そう思う」と回答した児童の中で、他の回答でも「そう思う（いつもしている）」と回答した児童の割合（%）

	新庄北小学校		旭ケ丘小学校	
	9月	12月	9月	12月
3 学校のきまりを守ることは大切だ。	88.2	87.9	93.5	89.8
4 きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる。	50	69.7	65.3	75.1
14 学校のきまりを守っている。	20.6	27.3	33.2	42.1
「8 人と助け合う」で「そう思う」と回答した人数	35/41人	34/40人	199/222人	197/220人

表５で「８ 人と助け合う」で「そう思う」と回答した児童の中で、「３ きまりを守る意識」も選んだ児童は、両校で、９月と12月とも約９割となっている。ここから、人間関係を維持向上させようとする意識は、約束やきまりを守ろうとする意識につながっている可能性がうかがえる。そして、「14 きまりを守った行動」を選んだ児童の割合が、両校とも取組後に７ポイントから９ポイント上がっている。「４ きまりがあるから、みんなと気持ちよく過ごせる」という、約束やきまりの意義の理解の項目の割合の高まりとも合わせて考えると、取組を通して約束やきまりの意義への理解が深まり、約束やきまりを守るという行動化にまで至った児童が増えていることがうかがえる。

これらのことから、自分の役割を自覚しその責任を主体的に果たすことの意義を理解することが、人間関係を維持、向上させようとする意識の高まりにつながっていく可能性が高いこと、また、人間関係を維持、向上させようとする意識の高まりは「学校のきまりを守ることは大切だ」「学校のきまりを守っている」という意識の高まりにつながる可能性が高いことを示している。なお、旭ケ丘小学校の報告では、指定研究員の学級だけではなく、学年全体（６学級）としての意識の高まりが報告された。これは、学年及び学校全体での協力体制による取組が、その土台となったのではないかと推察する。

今回の研究の結果から、学校全体の道徳教育の取組とともに、高学年の４－（３）の内容項目に焦点を当てた道徳の時間と体験活動を関連させた取組により、集団の中で自分の役割を自覚しその責任を主体的に果たすことの意義の理解を図ることによって、規範意識が高まる可能性を示すことができたのではないかと考える。

(3) まとめ

過去３年間の研究を踏まえた今回の研究結果とともに、規範意識を高める道徳教育の展開について記しておく。

ア 道徳教育推進教師を中心に学校全体が協力して取り組む

道徳教育の充実を図るために、道徳教育推進教師を中心に学校全体で道徳教育に取り組む協力的な体制づくりがポイントとされている。その際、道徳教育推進教師が道徳教育推進の役割を一人で担うのではなく、研究主任、教務主任、道徳主任等と連携しやすい体制づくりが重要である。

今年度は、規模が違う二つの小学校での取組の具体を示した。学校の規模により、教職員の数も大きく違うので、その規模に合った体制づくりが必要となる。小規模校においては、一人の教員が複数の校務分掌をもたざるを得ず、負担感は大きい。しかし、少人数であるので、共通理解が早く進み、機動的に動くことができる。一方、大規模校では、大人数であるため、校務分掌での負担感は少ないが、学校全体はもちろん、学年として共通理解を図るにも手続きや時間がかかってしまうことが多い。両校の取組の中で示しているように、小規模に応じた役割での連携や、大規模に応じた複数の道徳担当による推進体制などそれぞれの学校の特色を踏まえた体制を築くことが大切である。

体制づくりとともに大切なことは、教職員の意識の向上である。今回の両校の教職員のアンケート結果からも、規範に関する意識を高める取組の重要性は認識しているが、十分に取り組めていないことが課題となっている。そのためにも、道徳教育に関する研修により、各教職員の意識の向上や取組に対する共通認識を図ることが重要となるであろう。今回の報告の中では、外部講師等を交えての研修だけでなく、教職員から課題等を聞き取り、それに応じた内容の研修や、道徳教育推進教師が中心となって進めた研修、複数の授業公開による研修など、複数回の研修機会を確保したことが報告されている。道徳の時間を要として学校教育活動全体を通じて行う道徳教育や、道徳教育の中核的な役割を果たす道徳の時間の指導についての意識を高め、学校全体が同じ目標に向かって取り組んでいくことが重要である。

課題としては、「学校の実態や特色を踏まえた道徳教育推進体制の具体や学校全体で進める道徳教育の更なる具体を示すこと」、「家庭の教育力や地域の教育力の向上につながる、学校と家庭・地域が連携した道徳教育の取組の在り方を探ること」などが挙げられる。

イ 体験活動と道徳の時間を関連させ、集団における役割を自覚しその責任を主体的に果たすことの意義の理解を図る

昨年度までは､約束やきまりを自分たちでつくるなどの体験活動と道徳の内容項目４－(1)の道徳の時間を関連させ、約束やきまりの意義の主体的な理解を図る取組を行い、規範意識の向上につながる可能性を示してきた。今回は、集団で目的を達成する際に必要となる役割を話し合い、それぞれの責任を果たしていく体験活動と高学年４－(3)の内容項目の道徳の時間を関連させ、集団の中での役割を自覚し、責任を主体的に果たすことの意義の理解を図る取組によっても規範意識の向上につながる可能性を示すことができた｡これらのことから、道徳の内容の４の視点（主として集団や社会とのかかわりに関すること）から道徳教育を充実させることで規範意識の向上を図るという､様々な道徳教育の展開の可能性がうかがえる。

取組においては、約束やきまり、役割についての意味を押しつけたり、単に理解させたりするのではなく、自分たちで考え、つくり上げる中で、約束やきまり、役割が自分たちの生

活をよりよくしたり、お互いに気持ちよく活動できたりするものであることを実感させることが大切である。集団や社会の中でよりよく生きるためにどうすればよいのかということを主体的に捉えさせていくことが、よりよい人間関係を維持したり、その関係を向上させようとする心の育成につながり、ひいては、よりよい人間関係に必要な規範を大切に思えるようになるのではないかと考える。また、自分たちでルールを作ったり、役割を考えたりするという、より意図的な体験活動を設定するとともに、そこで気付いた道徳的な価値の自覚をしっかりと深める道徳の時間を大切にしたい。各学校の道徳教育における課題や重点目標を明確にし、学校全体として、重点目標に沿った、より意図的な体験活動の設定や、道徳的価値の自覚を深化していく道徳の時間の充実が必要である。

課題としては、「道徳の時間と体験活動を関連させて規範意識を高める年間を通した取組の具体やその効果を示すこと」、「４－(1)及び４－(3)以外の内容項目に焦点を当てた規範意識を高める道徳教育の取組の可能性を明らかにすること」などが挙げられる。

６　おわりに

今、社会は急激に変化している。その中で、人々の意識は「公共性への関心を薄め、私生活とその中核に位置する『私』への関心の比重を高める」流れにあり、「人と人との結びつきを希薄にし、集団や組織や地域社会の共同性へのつながりを弱めてき」ているという（森田 2010)。そのような社会を生き抜くためにも、児童は、集団や社会の様々な約束やきまりを意識していかねばならない。ゆえに、「人と人が共に暮らす社会においては、相互尊重の精神を共有するために、最小限の法やルールは必要である。そして、法やルールを守ることによって自分の暮らしもまた守られているという互恵的な性格にあるという本質を、私たちは子どもにきちんと伝える責務がある」（上杉 2011)。我々は、子どもの教育に携わる者として、規範に関わる教育の再認識を迫られている。その際、約束やきまりについて、集団や社会との関わりについて、より主体的に考えさせていく道徳教育の視点が重要になってくる。

児童生徒の規範意識を高めるために道徳教育をいかに展開していくのか、今後も研究を進めていきたい。

参考・引用文献等

(1)　文部科学省（平成20年)『小学校学習指導要領解説　道徳編』日本文教出版

(2)　文部科学省・警察庁（2006年)『児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料』

(3)　平成19年度全国学力・学習状況調査　調査結果資料＜29. 奈良県＞
http://www.nier.go.jp/tyousakekka/todoufuken_web/29_nara.htm

(4)　平成20年度全国学力・学習状況調査　調査結果資料【都道府県】
http://www.nier.go.jp/08chousakekka/08todofuken_data/29_nara.htm

(5)　平成21年度全国学力・学習状況調査　調査結果資料【都道府県】
http://www.nier.go.jp/09chousakekka/09todoufuken_data/29_nara.htm

(6)　平成22年度全国学力・学習状況調査　調査結果資料【都道府県】
http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/todoufuken_chousakekka_shiryou/29_nara.htm

(7)　平成24年度全国学力・学習状況調査　調査結果資料【都道府県】
http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/todoufuken_chousakekka_shiryou/29_nara.htm

(8)　永田繁雄「実社会や実生活とのかかわりを大切にした道徳の時間の指導の展開」(『初等教育資料』平成18年11月号」文部科学省　東洋館出版社) p54
(9)　永田繁雄・島恒生編（平成22年)『道徳教育推進教師の役割と実際』教育出版
(10)　森田洋司（2010年)『いじめとは何か』中公新書p56
(11)　上杉賢士(2011年)『「ルールの教育」を問い直す』金子書房 p vii